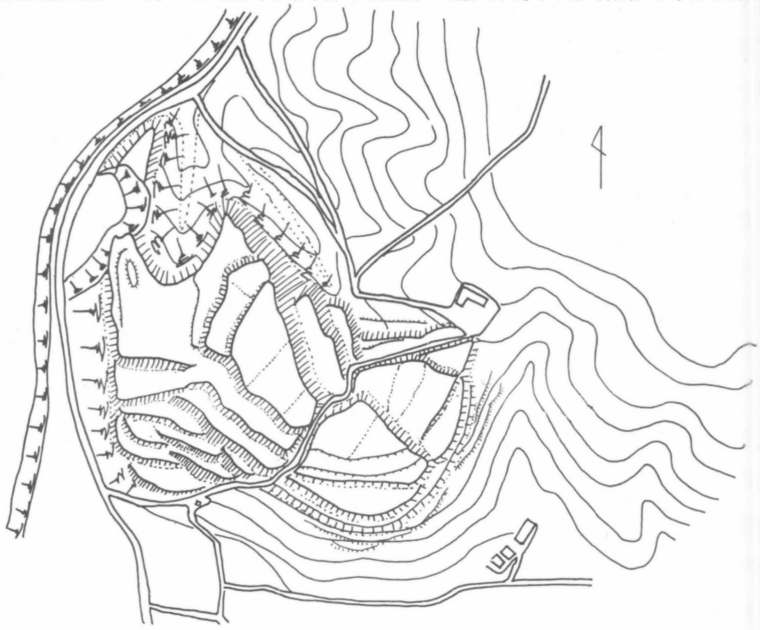
薄衣城　（米倉館、搦手館）　川崎村薄衣字畑ノ沢

薄衣の中心から南へ約1kmの北上川を臨む丘陵突端にある。西に北上川、南は急峻な崖となる。同城より南450mに安養寺がある。標高78.4mで、推定城域東西400m南北410mである。

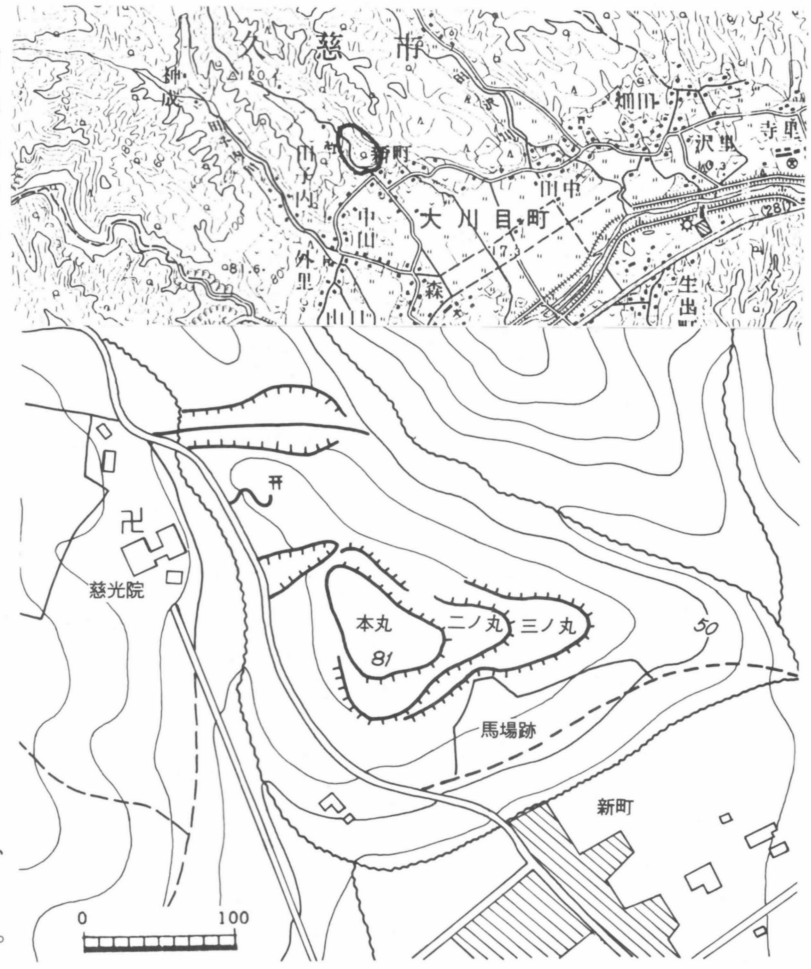
主郭（100m×50m）の西には、標高68mの郭が物見台と伝わる。主郭の東側には50m×60m程のゆるい壇の付く郭がありその更に北側に、同規模の郭が平場を伴っている。本郭の南斜面に帯郭の土壇が発達している。本郭・物見郭の北面は、自然の谷と採石採取場となっており急峻な崖である。現在採石は行なわれていない。

『仙台領古城書上』では、「一山薄衣城東西25間南北17間二ノ丸東西29間南北17間城主千葉中務」と伝えている。本城は千葉清村が康永2年に居住し薄衣氏を名乗った。同城跡には、元享2年（1322）の碑が残っている。



久慈城（新町館、八日館）、久慈市大川目町

久慈市街地の西方４km、久慈湾に注ぐ久慈川の河口から７km上流にある。広がる田園地帯と大川目新町の家並みを眼下に望み平山城である。山全体の規模は東西300ｍ×南北300ｍ。面積は７万㎡以上と広大であるが、各郭は比較的小規模である。城を乗せる山の標高は80ｍ程で比高は40ｍ。東西両面は各々深い沢となっており、西側には沢を隔てて大川目慈光院という寺の境内となっている。北面は堀切りで両方の沢を繋いでいる。郭の構成は、北から50ｍほどのところで峰を切る空堀によって大きく２つに分けられる。この空堀の北側は上にわずか10㎡程の小さな平場を乗せる郭で中央に稲荷社の祠がある。西側の沢沿いの道に鳥居がありこれをくぐって径を上ると祠の前に出る。これから空堀の土橋を渡ると南側が主郭部で、約２千㎡の南北に長い平場がある。その平場を南側から抱えるように幅５～25ｍの帯郭が３重（３段）に囲んでおり、地元では、最上部の平場を本丸、帯郭を上から順に二の丸、三の丸、馬場跡と呼んでいる。現況は殆んどが山林・原野である。



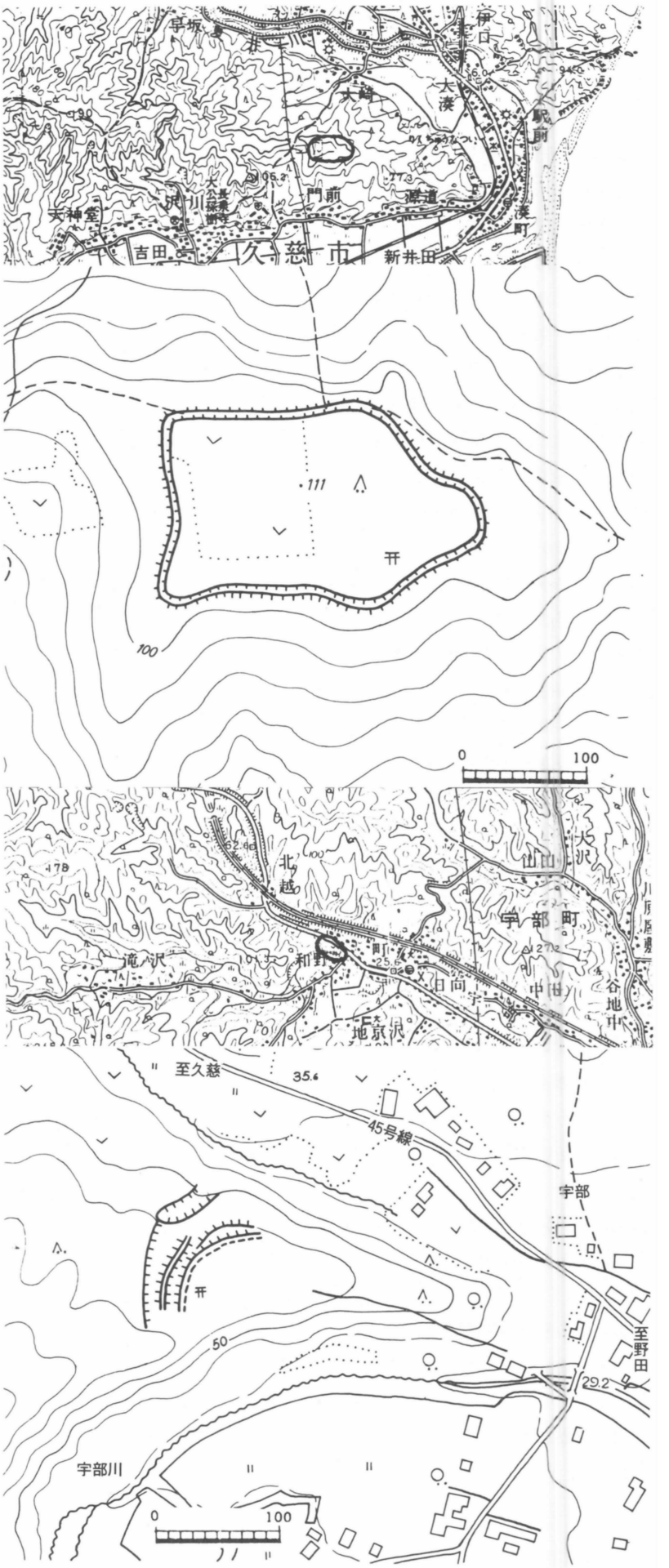
九慈城の位置についてはこの外に、嘗、新町の南側の畑の中に堀屋敷とよばれる堀に囲まれた平場（東西 250ｍ×南北 400ｍ）があり、これを当てる説（「南部諸城の研究」）等があるが「古城館趾考」、「日本城郭大系」ではこの新町館を久慈城とし、さらに「日本城郭大系」では堀屋敷は久慈城の平常の居館であろうとしている。山城からこの堀屋敷までの距離はおよそ 150ｍであると思われるが、現在、殆どその面影は無い。

城主である久慈氏は南部氏の同族であり、周辺の八戸氏野田氏、九戸氏らと姻戚関係を結び九戸地方に大きな勢力を振るった。天正19（1591）年九戸争乱の際、久慈備前守直治、正則父子は、九戸方の武将として奮戦したが敗れ、九戸政実とともに三迫（現在の宮城県栗原郡栗駒町）で処刑された。

また、久慈本宗の系図のなかに、直治の父の弟に出奔して津軽大浦氏の養子となった十郎（平蔵）がおり、後の津軽為信と伝えられるが、これについては、南部と津軽の両方に異説がある。

新城館（大崎館）久慈市夏井町

久慈市街地、久慈川と長内川の合流点の北方1kmの新城平という山の上にある。標高110m。東西250m×南北150m、総面積およそ30,000㎡の広大な山城である。20,000㎡もあろうかという大きな平場のぐるりを幅2～3mの帯郭様のテラスで囲んである。このテラスから上の平場までの落差は2.5～4mである。他に遺構らしきものは見当らない。郭の南東隅にテラスから上がる径があり、ここには鳥居が立っている。上がったところに小さな祠があり、十和田社、龍神が祭ってある。明治33年の建立とある。この館跡の100m程西側の屋根に切り通しがあるが、昔は久慈から夏井大崎に至る山越えの道があり、ここが峠であった。現在はあまりはっきりしない径となっている。館の上からは久慈川、長内川の両流域と河口、久慈湾がみわたせる。現況は大部分が山林原野で一部牧草地となっている。文献資料は無く、城主などは不明である。



宇部館（八幡館）久慈市宇部町

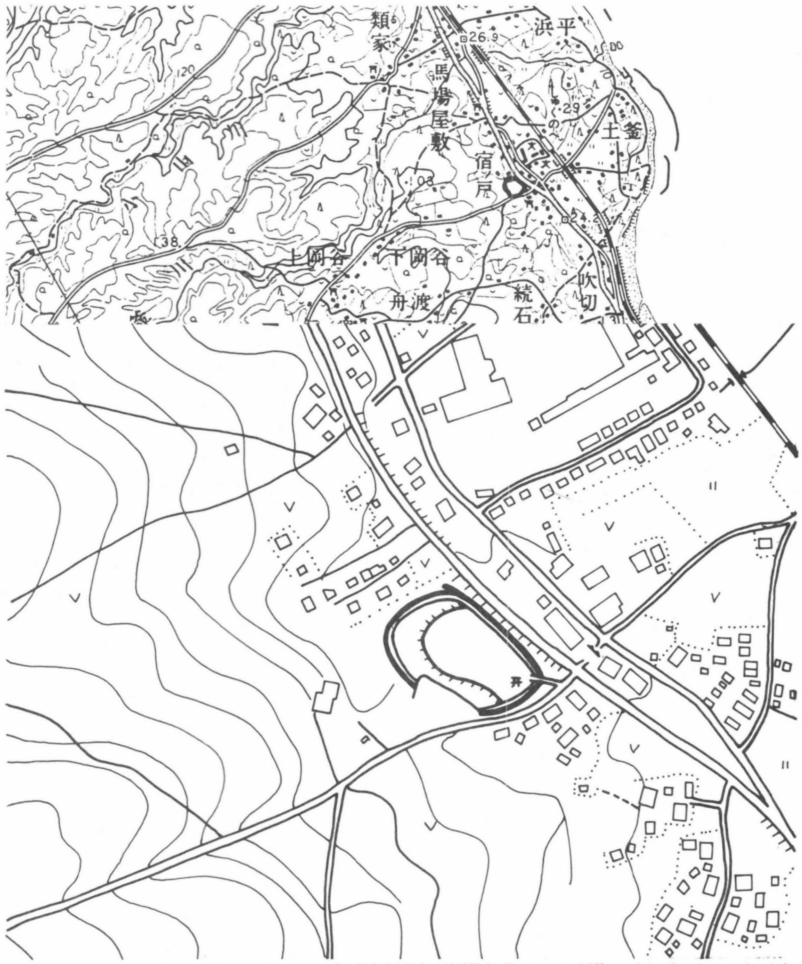
宇部館は久慈市街地から国道45号線を7.5km南下、野田まであと4.5kmの位置にある。十府ケ浦に注ぐ宇部川とその支流北ノ越川に挟まれた丘陵（野目山）の突端に造られており、眼下に宇部の集落を望む。比高は25m前後。ここは山根方面への分岐点でもある。山側は二重堀で切ってある。単郭で、郭は東側先端部がすぼまる三角形をなしておりその規模は東西150m×南北20～60m、面積は4千㎡ほどである。二重堀は幅30～40mで、内側（郭側）の堀は浅く、平場から底までの落差5～6mであるのに対し外側（山側）の堀の底までの落差は12～15m程である。更に二重堀に沿った郭の縁には高さ1～1.5mの土塁が残っており、その脇に八幡宮の祠がある。館主は野田氏で野田城完成後これに移り、宇部館は出城となったと考えられている。この地の字名「十三塚」は天正19年の九戸争乱の際久慈備前守政則の家臣13人が乱入、切り伏せられ葬られたことによるという。

宿戸館　九戸郡種市町宿戸字宿戸

宿戸集落の西側を通る国道45号線上の海岸段丘面に位置する。南北70m、東西40mの南北に長い単郭で、その周囲に堀が巡っている。堀は国道45号線に面した館の東側で保存状態が良く、幅５～６ｍ、深さ2.5～3.0mを測りり、郭を全周するが、南西側の一部は宅地造成により破壊されているし、南東端の登り道により切られている。郭の東側は幅20m、長さ50mの平場となってており、この平場より0.5～1.0m程低くなったその周囲が緩やかな斜面となっているが、この平場に沿って堀がめぐる可能性もある。

周辺には馬場屋敷という地名や屋号を館という家もあるし、館の東南隅に羽黒神社があり、更に館の南側50mには、元和８年(1622)銘の棟札の残る熊野社神がある。

羽黒神社の境内や西側の宅造により一部破壊されている箇所もあるが、市街地に接した館としては堀、平場ともに山林で保存状態は良い。居住者、存続時期等の歴史的背景については不明である。



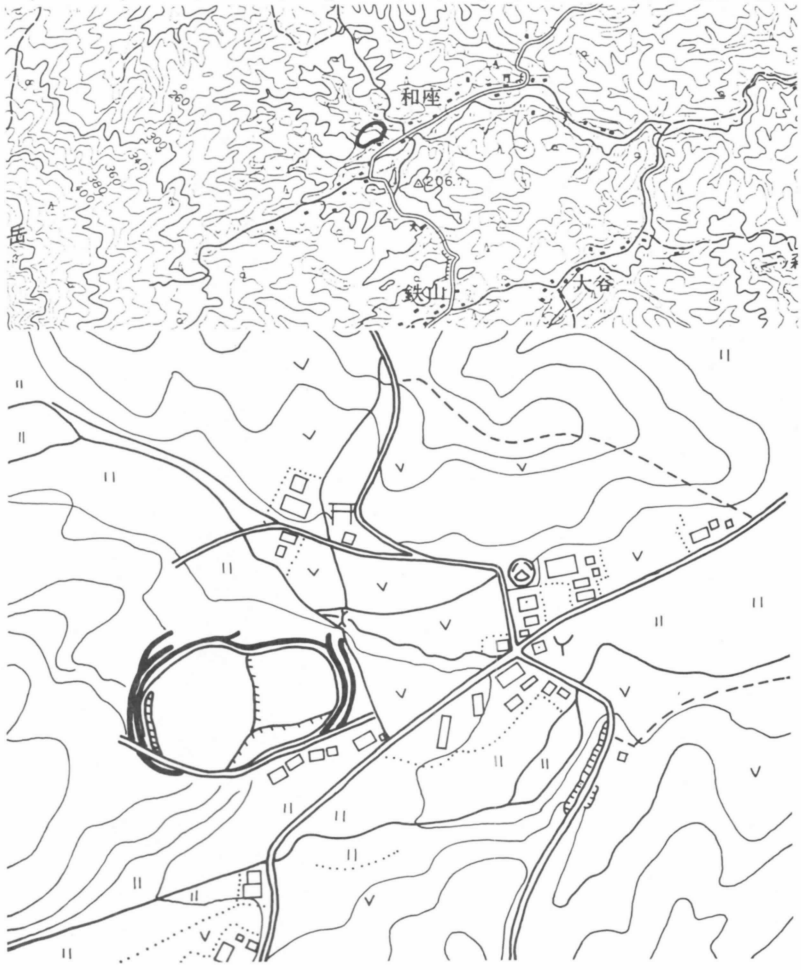
和座館　九戸郡種市町和座字中和座

種市から９km内陸の中和座地区にあり、和座川南岸の丘陵地に位置する。東西 120ｍ、南北65mの単郭で、中央でやや窪んだ自然地形をそのまま郭としているため形態は瓢単型に近い。この郭のくびれ部から東側は神社の建設予定地で全面削平されているが、削平地と西側の平場とは３～５ｍの段差となる事からあるいは平場は二段になっていた可能性もある。

堀は幅が５～８ｍ、深さが１～３ｍの凹地となっているが、いずれも傾斜地にあるため平場からの深さは４～10mとかなりの深さとなっている。館の東側に林道があるため破壊されているか、ほぼ郭を全周しており、しかも北側の一部を除いて二重になっている。

堀のなかには、郭に連続しないで北側の沢に抜けている箇所もあるが、特に郭の東端では外堀が30m程北側の沢にぬけている。

平場の西端に幅1.5m、高さ３ｍの土塁が残っている。別名長塚館、蝦夷館とも言われるが歴史的背景については何ら資料がない。



西の館　九戸郡種市町宿戸字上岡谷

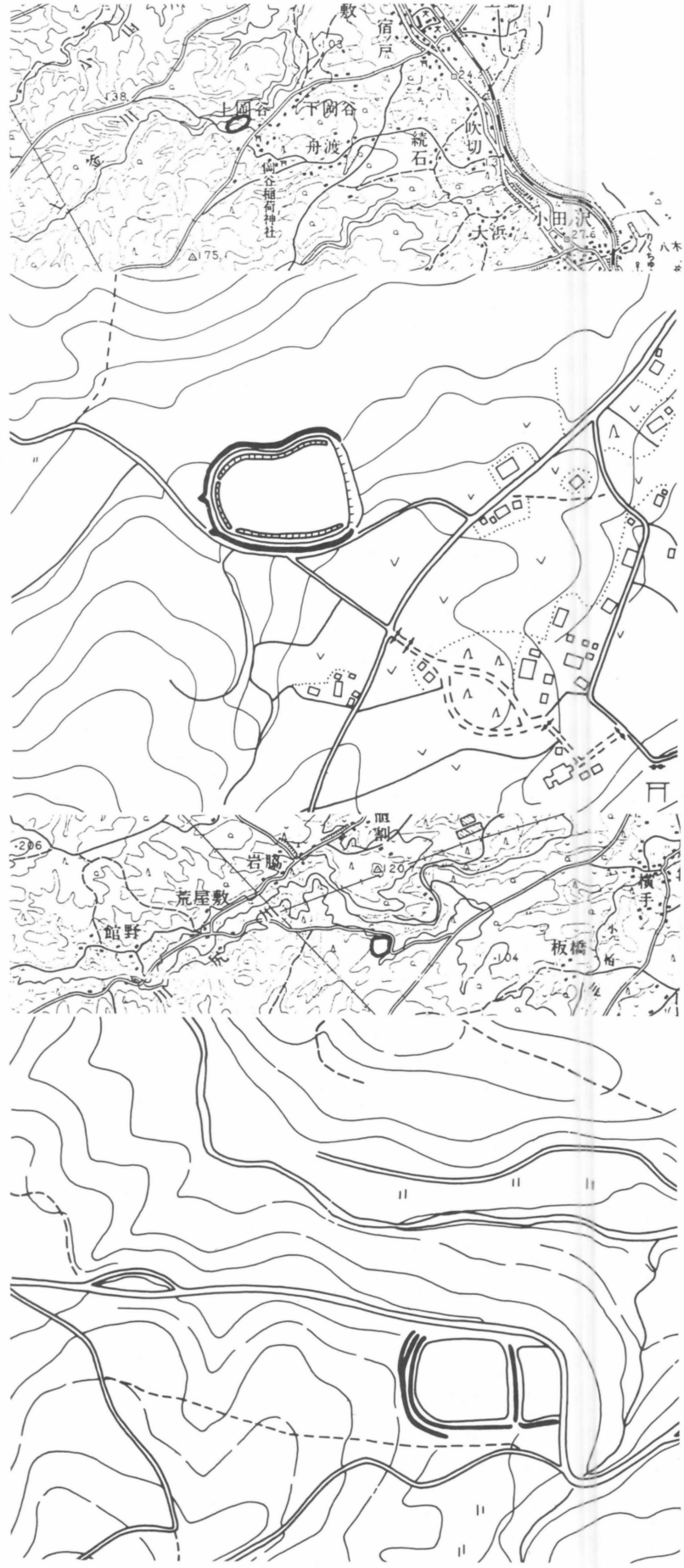
宿戸の内陸1.5kmにある上岡谷集落の北西にあり、土釜川南岸の丘陵地に位置する東西120m、南北130mの単郭で、全面がほぼ平坦な平場となっている。館は、土塁と堀により区画されており、比高30mの南側の急崖を除いてほぼ全周している。堀は特に北側と西側で規模が大きく、幅10m、高さ３～４m程あるが、土釜川に面した東側では傾斜地にあるため規模が小さくなっているし、西側から北側にかけては更に二重になっている可能性もある。土塁も場所により規模は異なるが、幅２m、高さ１m程あり、堀に沿って平場の縁をめぐる。館の北側では堀と土塁が２ケ所で途切れているが、土塁と堀の切れる位置が鉤形になる事からあるいは桝形などの出入口に伴なう施設の可能性もある。

居館者等歴史的背景については不明であるが前述の宿戸に同じ構造の館（宿戸館）である。

小手野沢館　九戸郡種市町字荒屋敷

種市の西方3.5kmにあり、川尻川と小手野沢川に挟まれた丘陵を館としている。郭は東西方向に２郭が並列しており、東側の郭は県道軽米種市線により削平され半分程を欠失している。西側の郭は、東西110m、南北100mの方形を呈し、西から南にかけて堀が二重、三重にめぐっている。幅８～12m、深さ３～５mの堀で、北西端で三重になるが中途で合流し二重になっている。郭の北側下に県道軽米種市線があるため北側の堀の有無は確認できないが、北西端の三重堀はそのまま崖まで続いている。各郭の平場はいずれも平坦であるが、全面が籔地であり遺構については確認できなかった。館主、存続時期ともに不明であるが、地元では蝦夷館と呼んでいる。

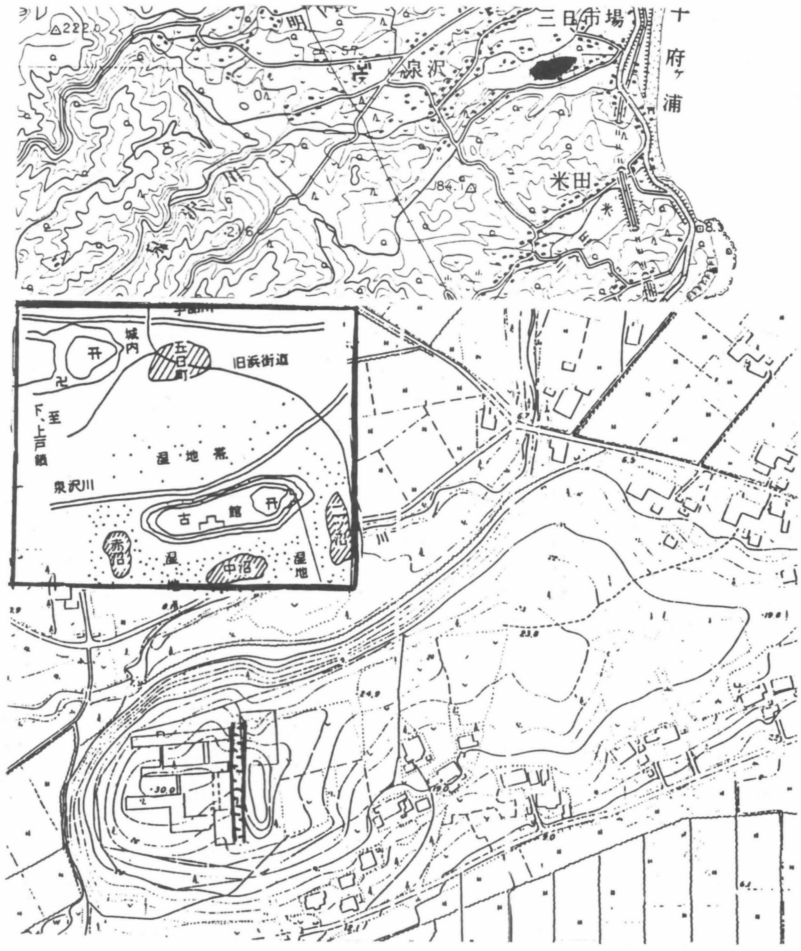
ただ占地、構造からはむしろ一般的な中世城館址に近いものであり、旧八戸藩の古文書では「小手野沢」という集落の存在を確認できている。中世に周辺を支配した種市氏の居城である種市城は東方１kmの近距離にある。



古館（野田城）九戸郡野田村野田字三日市場

三日市場の標高30mほどの独立丘陵を古館とよぶ。野田城の位置については諸説あるがこの古館と新館が最も有力な候補地である。この丘陵は現在野田小学校が建っており詳細は不明である。ただ、昭和44年の調査では多数の竪穴住居とともに宋銭、堀跡などが検出されている。堀以外は確認されていないので丘陵全体が館かどうか不明である。しかし北に泉沢川が流れ、耕地整理以前の南側は湿地帯で赤沼、中沼、二ツ沼があって堀の役割をはたしていたという。

古館は十府ケ森正吉祖の居城でもあったと伝えられるが不詳である。野田城主としては暦応元年（承元元年・1338）一戸実朝の後を継いだ親継に始まる。野田氏を名乗るのは慶長年間の野田薩摩守政義であるが、その子掃部助直親の条に「直親始めて在名野田を用いて野田と称す。古館を毀ちて宇部館に居る」とあるが、これは天正末年の山城破却以降を指すとおもわれる。



新館（野田城）九戸郡野田村野田字城内

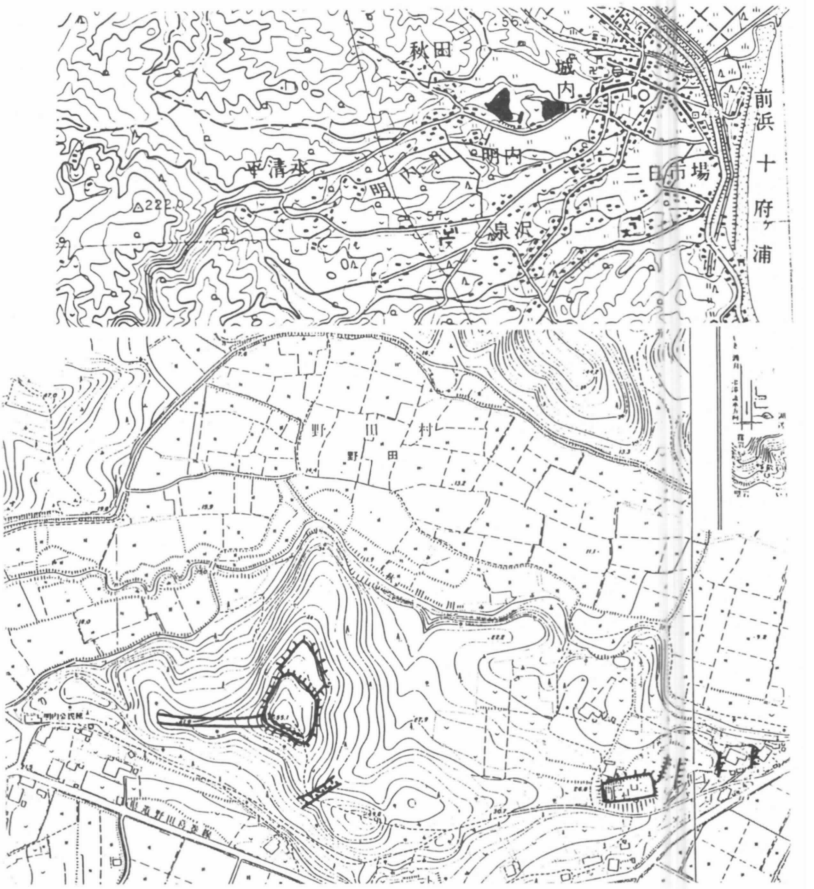
野田城の候補地の一つでもある。城内の海蔵院の西側にある。海蔵院の西に三つの台地が並ぶようにしてあるが、中央に位置する標高43mの台地上に館がある。周辺を削平した二郭から成っており北側は急峻な崖となっている。主郭は東西90m南北55m、二郭は一段低くなっており50m四方をはかる。西側には北を流れる宇部川に向って巾広い堀が沿っている。東側は現在切替河川となっていて様相は変っているが、堀が走っていた可能性が高い。右側の台地も館とする説もあるが、今までのところ明瞭な人工痕を見い出すことはできない。

当館は一説によると、山城破却後の野田領主が新たに館を新築し「新館」と称した、という。ただし、野田城に比定すると様相は一変する。城内周辺には「御田屋小路」「城内橋」「新館口」などの地名、屋号が残っている。

伏津館　九戸郡野田村野田字伏津沢

明内地区の標高55mの独立丘陵一帯に遺構が認められる。遺構は西側と東側に分けられる。西側の頂部に40m四方の主郭があり、その北側にも不整形な郭が続いている。主郭の南側には土塁があり、その西側には大手と推定される通路が残っている。丘陵東側の先端部には東西45m南北25mの平場があり、さらに東突端に向って三段の削平地があり、その一部には土塁も残っている。丘陵中央付近にはわずかであるが堀切状の遺構も認められる。東側と西側の遺構をそれぞれ独立した館とする見方もあるが、確定はできない。

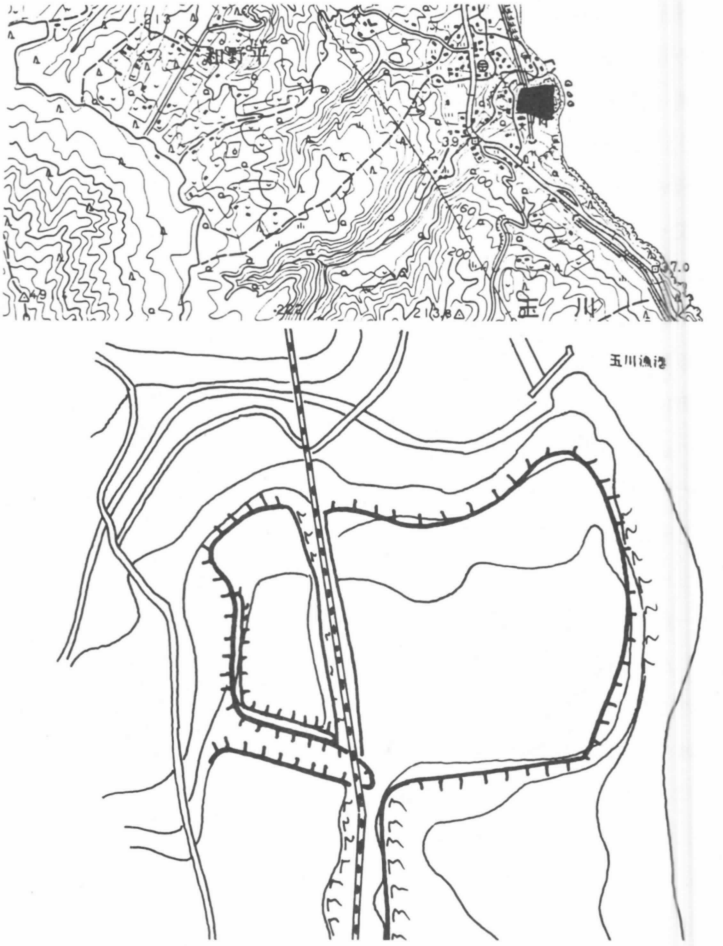
伏津館は安倍の臣、伏津新九郎忠信が居館としていたと伝えられるが、詳細は全く不明である。



玉川館　九戸郡野田村玉川字石門前

太平洋を望む海岸段丘上に位置する。北西を玉川、東を絶壁、南を深い空堀で区画した天然の要害であり、全体の規模は東西 250 m 南北 200 m に及ぶ。館の中央を三陸鉄道が走っているが西側が高く東側が低くなっている。西側の方が主郭であるらしく、東側は馬場であったと昔から伝えられている。主郭の南側は深い空堀となっており土塁には明瞭な石積が認められる。この堀の南側も平地になっているが旧学校地であったため郭となるかどうかは不明である。西側の斜面の一部にも石積が認められるが段丘礫層もあり、その区別は困難である。西行屋敷はこの館の玉川をへだてた対岸にある。

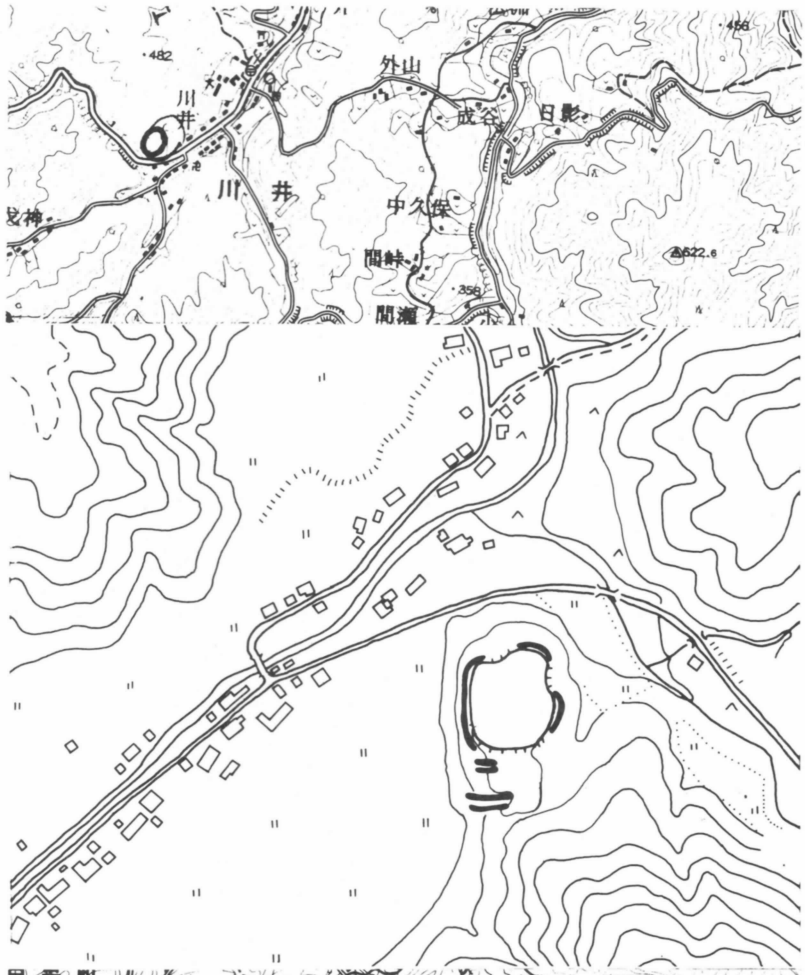
当館は野田城の支城とも玉川河内秀定の居館とも伝えられている。異説として三上氏4代兼綱が天授（永和）4年（1378）に野田玉川で生まれたとの記録、あるいは11代親綱が永禄9年（1566）正月玉川城中にて生まれたなどの記録もあるが、それ以上のことは不明である。（九戸地方史・上）



川井館　九戸郡山形村川井10地割後口表

山形村の中心部である川井盆地の西南端に位置する。川井川西岸の山地から谷底平野にせり出した標高320mの丘陵にあるため眺望にすぐれ、川井の集落を一望できる。館の周囲は、比高30mの急崖となり、東側の下を川井川が流れ、西側はそのまま山へ連続するが、途中の鞍部２ヶ所に二重の堀を穿ち、後方の山と区画している。堀の規模は、外側が幅５～６m、深さ２～３m、内側が幅0.5～１m、深さ0.5mと外側の堀が大きい。平場は径26×18mの楕円形を呈するが、緩やかな傾斜を持っ自然地形に近く、その下の斜面に、幅３～４mの帯状の平坦面があり、急傾斜の部分を除きほぼ一巡する。この平坦面も堀跡と考えられる。

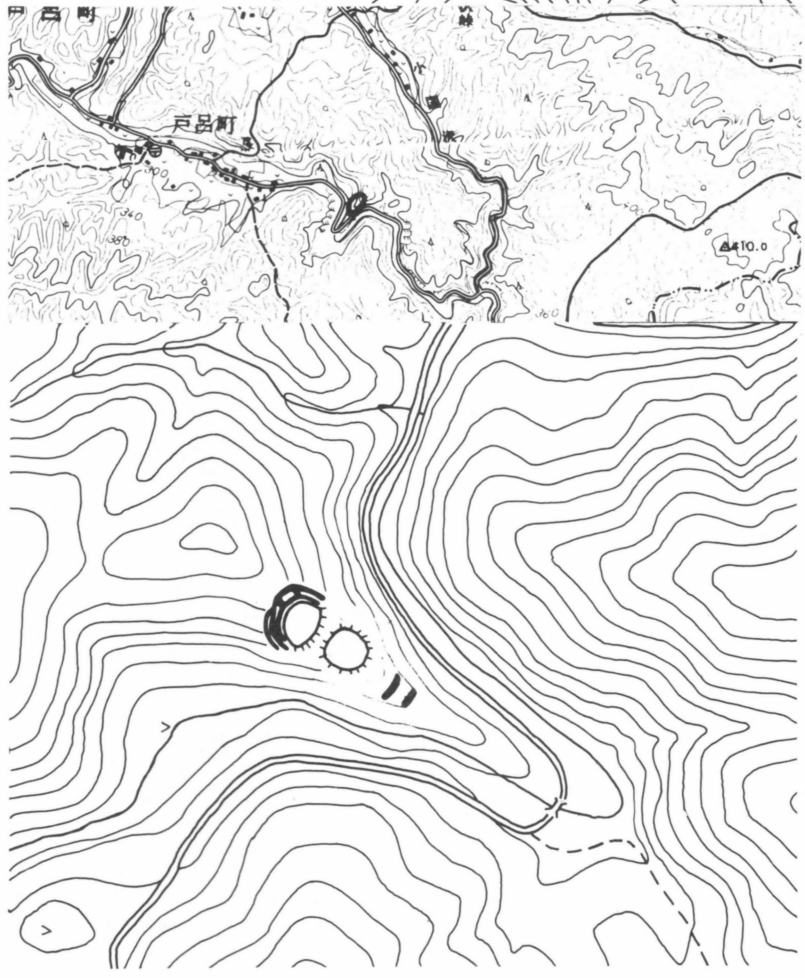
館主、沿革ともに不明であるが、館の形状、更に狭隘な平場から見張りの館との説もある（二戸郡、九戸郡古城館趾考）。ほぼ全面が草地であり、保存状態も良い。



中輪館　九戸郡山形村字戸呂町

戸呂町の東方で急カーブで蛇行する戸呂町川の間に突き出た標高320mの山地尾根に立地する。戸呂町川と館との比高は、50m程あり、特に西側は急崖となっている。２郭あり、いずれも10×10m、10×６mの狭隘な平場を持つが、ところどころに径２～４mの竪穴の痕跡が残っている。郭の間は平場との比高４～５mの緩傾斜の凹地となっているが、人工的な堀ではない。堀は、南北両端に比較的良好に残っており、特に北端の堀は、幅３～４m、深さ２～３mで、場所により二重、あるいは三重になっている。この堀は郭を囲繞するものではなく中途で途切れるが、外側の堀は北側の谷筋に沿ってそのまま下降している。東側の堀は、狭ばまった尾根の２ヶ所にあり、堀切の状態となっている。

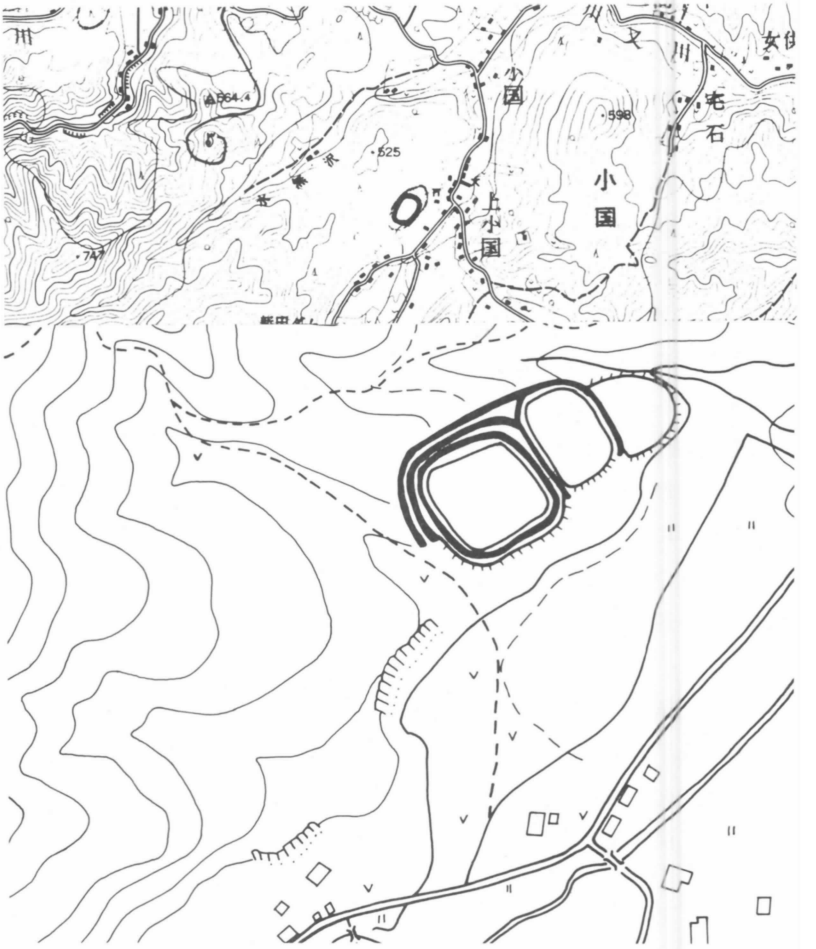
館の周辺は現在の集落からかなり離れているが、盆地に突出しているため眺望が良く、戸呂町を一望できる。館の崎、陣内、矢の沢の地名や周辺の沢に採掘場跡が残っている。



判官館、九戸郡山形村小国字上小国

山形村の南東に位置する小国地区の中心部上小国の西側段丘面に位置する。川又川沿いの平野部に面した段丘崖は、比高10mの急崖で、更にこの急崖から南西方向に谷が走っており、その間に館を構築している。館の北側の先端部は、共同墓地となり削平されているが、その南側に2つの郭がありそれぞれ二重、三重の堀により囲まれている。南側の郭が100×60m、北側の郭が80×40mのいずれも南北方向に長い郭で、南側の郭が若干大きい。堀は幅6～8m、深さ2～4mで、保存状態も良いが、特に外側の堀が比較的規模が大きい。平場全面に笹が蔓延しており、平場の調査はできなかったが、ほぼ平坦になっているものと思われる。

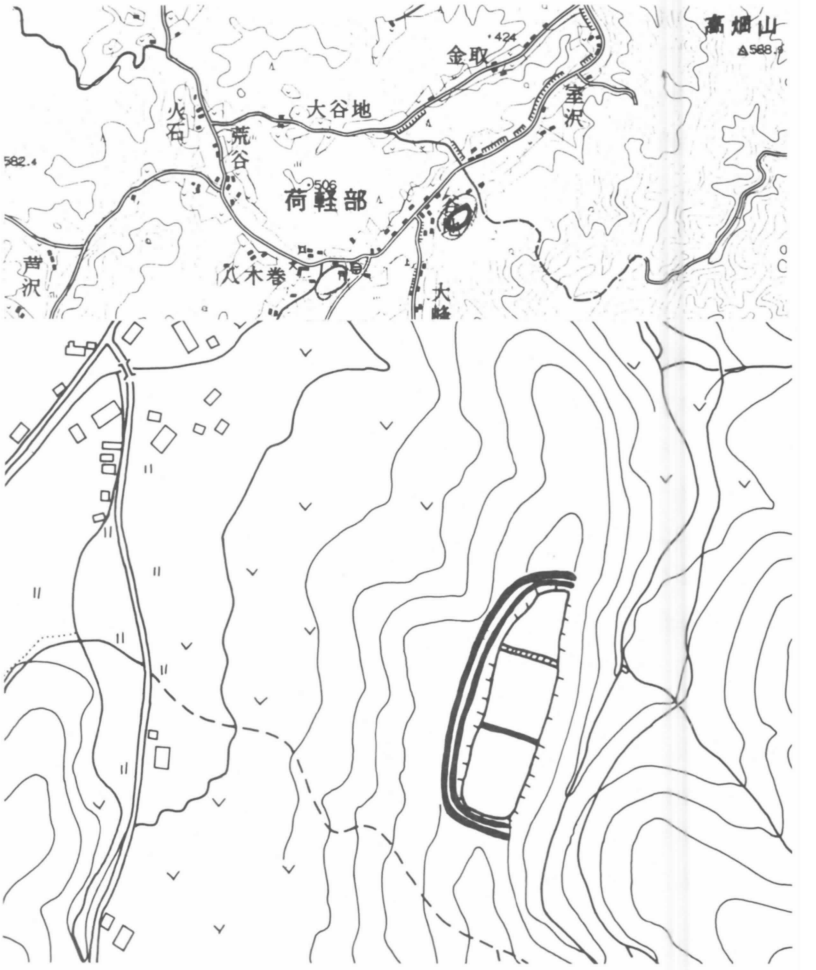
築城者、存続時期とも不明であるが、地元には小国判官兼市の居館であったとの伝えがある〔山形村誌〕。別名高館、あるいは小国館とも言われ、館南方の山は矢立と呼ばれている。



荷軽部館　九戸郡山形村荷軽部

日野沢川の上流域に相当する荷軽部地区では、東岸に比較的段丘が発達しているが、この段丘後方の丘陵頂部に館がある。日野沢川に平行する南北に長い丘陵があるが、東側が急崖、川に面した西側が緩傾斜となっており、南北両端と西側斜面にかけて幅3～6m、深さ2～3mの堀が二重に残っている。南北80m、東西10mの細長い単郭式の館で、平場は更に堀、あるいは墨状の土手によりほぼ等分に3区画されている。堀の規模は幅2～3m、深さ1m程で外側の堀よりは規模が小さく、しかも外側の堀にはつながらない。墨状の土手も小規模であるが、堀を伴なう可能性もあるし、西側斜面の段状の平坦面も堀跡の可能性が強い。全体に保存状態は良いが、一部林道により外側の堀が破壊されている。

館主、沿革ともに不明であるが、館の南西下に地元で採掘跡だと言われている不規則な凹地があるほか、金取、高屋敷などの地名が残っている。

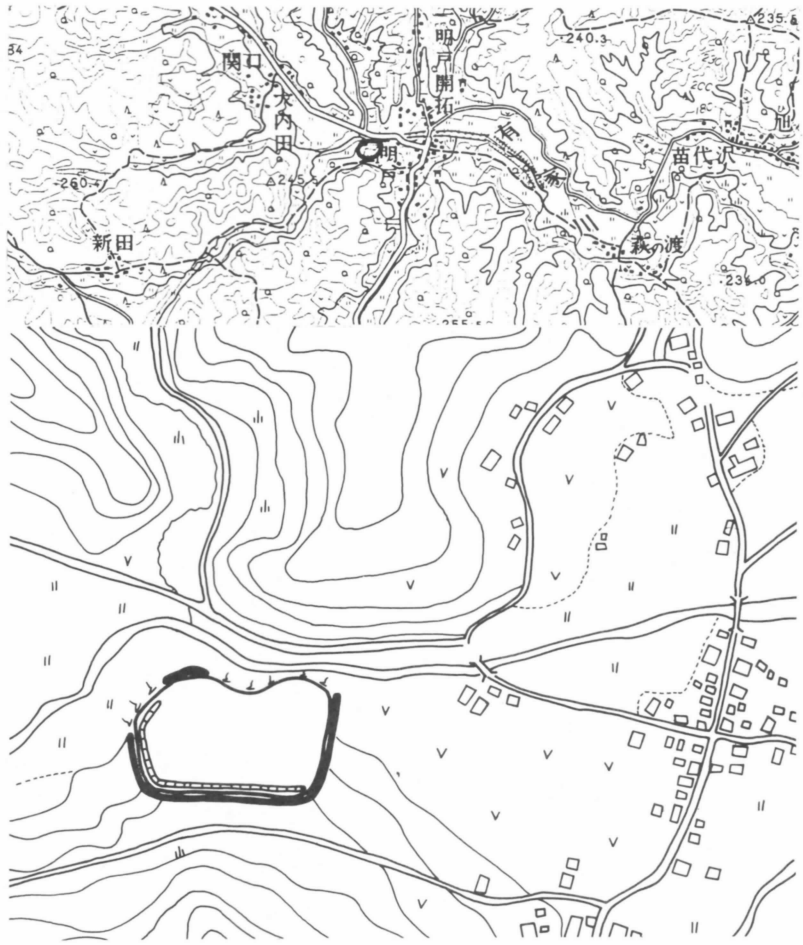


明戸館　九戸郡大野村大野字明戸

大野村の中心地大野の北方２kmの明戸地内にある。大内田川南岸の段丘上にあり、現在の集落は東側に位置している。

館の北側は大内田川に面した急崖となるため堀は途切れるが、東側から西側にかけて幅７～８ｍ、深さ３～４ｍの堀が残っており、南側と東側では幅1.5ｍ、高さ1.5ｍの土塁を伴なっている。単郭で径65×50ｍの東西方向に長く、その中の東側径50×40ｍの範囲が平坦で、その外側は緩傾斜の平場となっている。

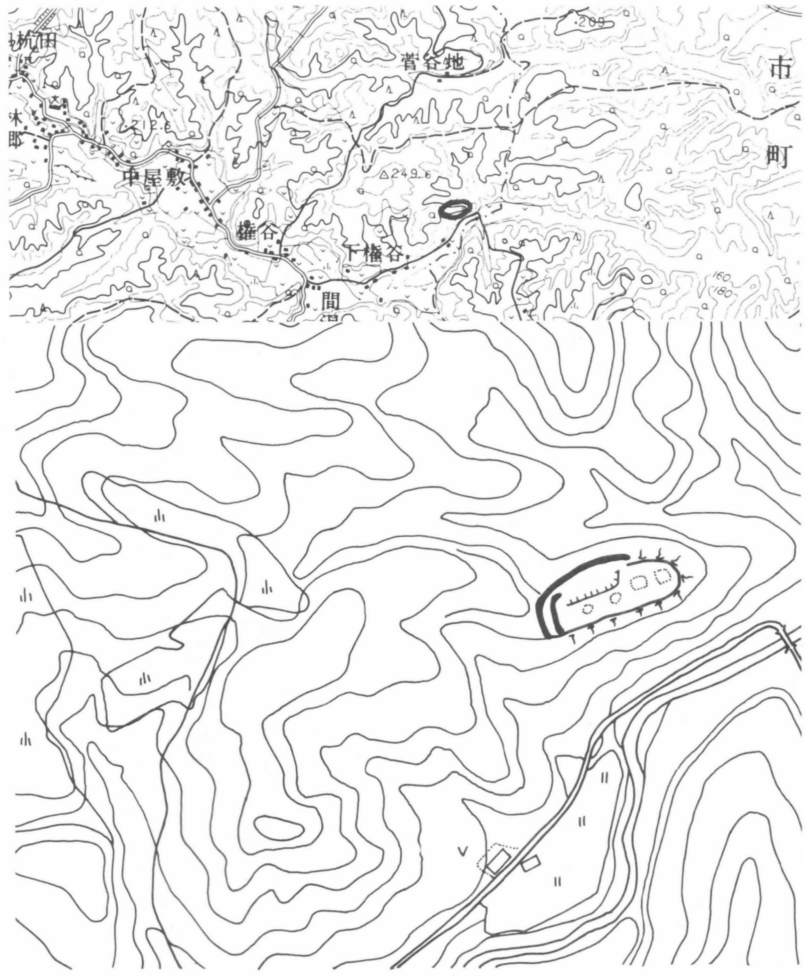
築城者、沿革ともに不明であるが、大正10年調査の史跡名勝調査報告によると館の東南隅に井戸があり、水の涸れる事は無いとの記載があるし、館の西側に古沼という沼があったとも言われるが、そのいずれも現在は確認できない。館は山林とやぶ地となっており保存状態も良く、占地、構造ともに大野村の他の城館とは異なり、中世期一般の館に近いものである。



牛転ばし林館、九戸郡大野村大野字下権谷

種市町との町境に近い下権谷の集落から、更に東方に500ｍ程離れた狭隘な沢に突き出た標高200ｍの山頂に位置している。館の下を流れる有家川との比高は50～60ｍはあり、しかもかなりの急傾斜の山地となっている。館から現在の集落を見わたす事はできない。東西55ｍ、南北12～20ｍの東西方向に長い郭で、そのまま尾根続きとなる西側に幅２～３ｍ、深さ１～２ｍの堀を二重に穿ち区画しており、外側の堀はそのまま北側の斜面下に連続している。平場は東西に長い尾根上にあるため全体に狭いが、この平場には径５～６ｍの方形、径３ｍ程の円形の２種類の凹地が残っている。方形の凹地は浅く深さ20～30cm程なのに対し、円形の凹地は深さ30～50cmと深くなっている。

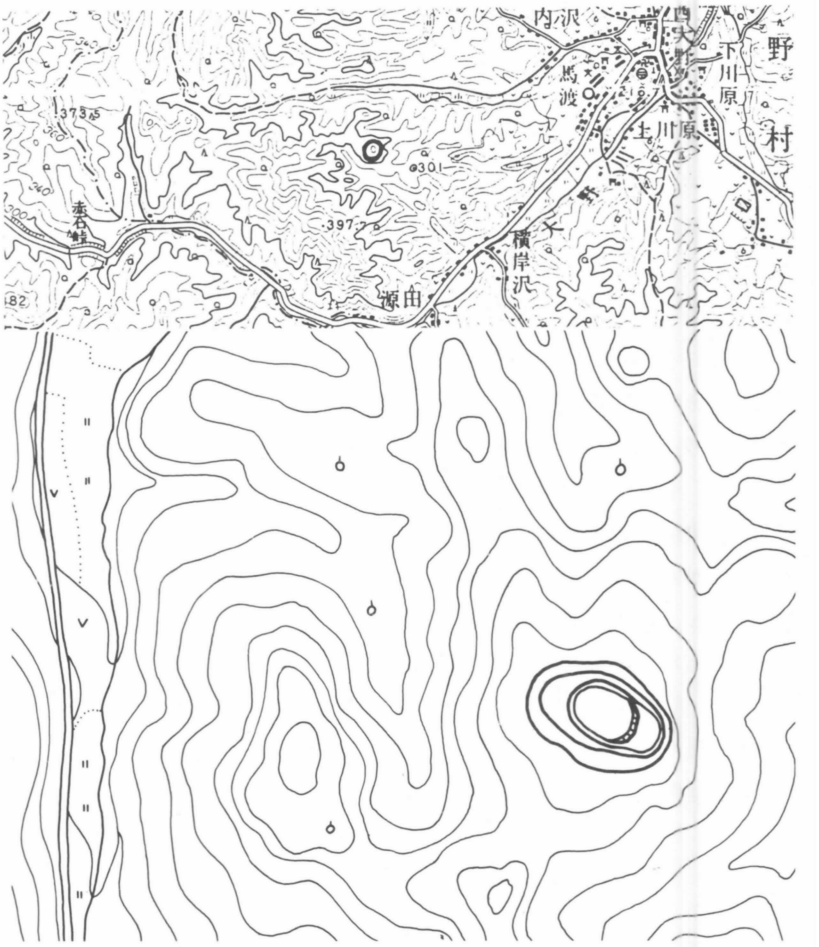
館主、存続時期ともに不明であるが、遺構の保存状態も良く、その立地、遺構の痕跡からも注目される館である。同様の凹地は同じ大野村のひともっこす館にもある。



蝦夷森館　大野村大字大野第10地割16の12字赤羽根

大野の市街地南西2kmにある標高300mの山地頂央に位置する。山は周辺では最も高く、大野の市街地に限らず、横岸沢、内ノ沢までも一望できる。典型的な山城で、径20～30m、幅5～10mの小規模な郭が2段になり、最頂部の平場が15×7mの楕円形で、更に東側に1.5m程低くなり12×10mの平場がある。山頂にあるため四周ともに斜面となっているが、特に北東方向は急崖であり登るのも容易でない。この崖を除き幅2～3mの堀が斜面を一巡するが、場所により二重、三重となっている。斜面にあるため各堀は4～6mの比高差を持つが、堀の深さは場所により異なり、深い場所で1～1.5mの凹地となっているが、全部埋まり棚状になっている箇所もある。平場には、径3m、深さ30～50cmの竪穴が残っている。

蝦夷館との伝え以外居館者、その時期ともに不明であるが、占地、形態ともに一般的な中世城館とは異なっている。



たてひら館　九戸郡大野村大野字柏木畑

大野の北西600mにある柏木畑の集落西側に位置しており、標高220mの丘陵頂部に立地する。2郭からなり、郭の間は比高20mの凹地となっているが、郭は西側が大きく、径100×30mの楕円形に近く、平場下の斜面に幅2～3m、深さ1～2mの堀がめぐっている。堀は郭をほぼ一巡するが、東側では上下に喰いちがい二重、三重になっている箇所もある。東側の郭は径25×30mのほぼ円形に近く、かなり小規模である。同じく平場下の斜面に幅1～1.5m、深さ0.5～1.0mの堀がめぐり、東側でも上下に喰いちがっている。平場は、西側の郭はほぼ平坦で、径6～7m、深さ20～30cmの竪穴が残っているが、東側の郭は西端が低くなり2段になっている。全面山林で保存状態も良く、遺構も明瞭に残っている。

由来等歴史的背景は、一切不明であるが蝦夷館との伝えがある。

大野館　九戸郡大野村大字大野第5地割30番字小屋ノ沢

大野村大野の谷底平野に岩ノ沢山から突き出た山地突端に位置する。谷底平野に面した西側は、急崖となりその下を大野川が流れ、東側も小谷がありそれぞれ区画されるが、南側はそのまま後方の山地へ連続するためその鞍部に幅９ｍ、深さ５ｍの堀を穿ち構築している。郭は三段になっており南から上段、中段、下段と徐々に低くなり、下段では更に西側に鉤形に屈曲している。上段と中段との比高は４～５ｍ、中段と下段との比高は10ｍ程ある。各郭の平場は、上段（南側）が径80×50ｍ、中段が径80×45ｍ、下段（北側）が60×60ｍのいずれも平坦で、形態は方形に近い。上段の平場で大野川に面した西側にも幅の狭い堀跡が南北に走っている。この堀以外に遺構は確認できないが、鎧金具が出土したと言われている。

築城者、築城時期ともに不明であるが、天正年間に九戸城に籠城した大野弥五郎の居館と言われる。

蝦夷館　九戸郡大野村大字帯島第１地割

大野村の南東に位置する帯島地区では、高家川西岸の丘陵先端部に蝦夷館と呼ばれる館が４ヶ所２kmづつ離れ並列している。第１地割の蝦夷館は、そのうちの西から２番目に相当する。東西に突き出た丘陵の尾根のため南側と東側は急崖となっており、後方の山地に連続する西側と小谷に沿った北側の緩斜面に幅３～４ｍ、深さ0.5～1.0ｍの堀があり二重になっている。この二重の堀は、北側斜面の中途で合流し、そのまま郭から離れ谷にぬける。堀の断面形はＶ字形で、特に外側の傾斜を強くしている事で共通している。北側斜面から東側、南側にも幅３～４ｍの平坦面があり続くが、この平坦面も位置、規模から考え堀跡の可能性が強い。単郭で頂央は東西100ｍ、南北50ｍの平坦な平場となっているが、西側に径６～７ｍ、深さ20㎝程の竪穴がある。

居館者、存続時期など歴史的背景については一切不明である。

普代城（三上館）普代村第７地割字明神

普代川の下流、河口まで１kmの右岸にある独立丘陵上に築かれた山城である。頂きの標高は82m。比高75mで、かなり険しい山である。南北はそれぞれ深い自然の沢となっている。東側背後はさらに険しい峰へと続いている。西側真下は普代村の中心部から太平洋岸、太田名部、黒崎方面へ抜ける県道で川の対岸に村中央の集落を一望できる。現在、頂きに至る道は無く、現況が山林原野のため、樹木が繁茂する時期の踏査は非常に困難である。西側から30mほど登ったあたりから頂きにかけて、幅1.5～1.8mの帯郭様のテラスが少なくとも８段ある。頂上部には300㎡足らずのスペースがあるが、特に作り出した平場には見えない。尚、この山のところどころに一見人工の石垣のように見える場所があるが、これは花崗岩の自然の露頭で、柱状節理により立方体に割れた大小の自然石である。

普代城は三上元綱の居館と伝えられる。

（十二） 二 戸 地 区 概 観

二戸地方は岩手県の北部に位置し、北上山地と奥羽山脈の間を北流する馬渕川と、その支流である安比川、瀬月内川など大小の河川域に沖積地が開け、その背後の河岸段丘面や丘陵地に縄文時代草創期以降の遺跡が広く分布する。県北部地方最古の土器が出土した軽米町馬場野Ⅱ遺跡をはじめ、縄文時代の調査例が急増しており、二戸市長瀬B遺跡、一戸町小井田Ⅳ遺跡、平船Ⅲ遺跡（以上早期）、二戸市中曽根Ⅱ遺跡（前期）、上里遺跡（前～中期）、一戸町馬場平2遺跡（中期）、軽米町叺屋敷遺跡・大日向Ⅱ遺跡（後期）、安代町曲田Ⅰ遺跡（晩期）など、集落遺跡の調査例が相次いでいるほか、古くは軽米町長倉遺跡（後期）、二戸市雨滝遺跡、一戸町蒔前遺跡（晩期）なども知られてきた。

弥生時代の遺跡は、二戸市大渕遺跡、一戸町上野遺跡、軽米町馬場野Ⅱ遺跡で竪穴住居跡を検出しており、集落の様相やその編年も明らかにされつつあるが、古墳時代についてはなお不明である。わずかに、南方との交流を示す石製模造品が一戸町から、北海道系土器である後北式土器が軽米町、二戸市から出土している。古墳時代末から奈良時代の資料も豊富で、二戸市、一戸町、軽米町で出土しているが、とくに二戸市の堀野遺跡をはじめその周辺の遺跡で集落の変遷をたどる事ができるし、二戸市には終末期古墳の一変型である堀野古墳、金田一古墳も分布し、弘仁2（811）年、文屋綿麻呂による爾薩体・閉伊の征討以前に、平野部を中心に農業を基盤とする社会が成立していたことを示している。爾薩体は、二戸市を中心とする一帯であり当地方の大半が含まれるものと考えられる。平安時代の遺跡は、主要な河川域の平野部から、さらにその支流域の山間部にまで拡大する。とくに、安比川流域の浄法寺町を中心とした地域で急増しており、なかでも飛鳥台地遺跡は当地方を代表する集落跡で、そのすぐ南方に八葉山天台寺がある。一方、西部に位置する安代町でも、「三代実録」にある上津野（鹿角）へ通ずる「流霰道」沿いにあり、上ノ山Ⅳ、扇畑などの調査例があるし、萩薬師という平安仏のある軽米町など、ほぼ全域に分布する。平安時代後半以降、在地豪族安倍氏は奥六郡を支配し、その地方に位置する仁土呂志が当地方に相当するが、平安時代末から鎌倉初期にかけて糠部郡が成立する。糠部郡内は、東・西・南・北の四門に分かれ、各門の下に一戸から九戸までの戸により行政区画されており、二戸市・一戸町・浄法寺町はその南門、軽米町・九戸村が西門に属す。すでに平安時代後半から馬産地として知られていた当地方は、鎌倉時代以降も各地で牧場が経営されるが、鎌倉時代は北条氏一族、南北朝以降南部一族の支配地となる。とくに、室町時代以降、三戸南部氏が抬頭し、積極的な拡大政策により糠部一円はもとより、北は津軽郡、南は岩手郡までを領有する。戦国時代末期になると、強力な南部一族間に内訌が起こり、南部信直と九戸政実の領土をめぐる争いとなり、領内を二分した抗争となる。決戦の場である九戸城の攻防では、豊臣秀吉の加勢をうけた南部信直方の勝利で終結するが、秀吉に本領を安堵された信直は、斯波・和賀・稗貫郡を加増され、慶長9（1599）年に不来方城に移り、盛岡藩主として知行制度を確立する。九戸争乱後、九戸城は福岡城と改められ、信直が盛岡に移るまでの居城となったが、その九戸城も寛永16（1639）年に廃城となるし、それ以前に信直は、秀吉に諸城破却を命ぜられ、天正20（1592）年に、一戸城・姉帯城・古軽米城・金田一城を廃棄している。

二戸地方の城館は、国指定史跡の九戸城をはじめ、一戸城、浄法寺城、軽米城、伊保内館など、それぞれ地域を代表する城館は、現在の集落に付合し点在する。いずれも居住者の判明するのは戦国時代末期の豪族の居城で、馬渕川、安比川、瀬月内川など、主要な河川とその支流域の段丘面、あるいは丘陵地に占地し、その分布は、安代町と一戸町南部で比較的稀薄なほかは、各水系沿いに全域にわたっている。いずれも5～10mの大規模な堀で区画された郭を持つが、前述の城館のほかに、九戸村江刺家館、一戸町姉帯城・中里館も大規模で、遺構も明瞭に残っている。以上の中世後半の城館跡のなかで、一戸城、上の山館で調査を実施しているが、とくに一戸城跡では、16世紀を中心とした遺構を検出しており、当地方の城館跡の内容も少しずつ明らかになってきている。

ところで、以上の中世後半の城館跡のほかに、軽米町では、山間地でも多数の館を確認しており、館あるいは館森という同名の館が各地区に分布しているが、そのほか、古山・古館・なら館・館ぐし・白山などの館もあり、いずれも蝦夷館と呼ばれている。占地・構造ともに既述の館群とは異なっており、なら館、民田山の館森の平場では、竪穴住居跡の痕跡も確認できる。地元では平安時代の館跡としているが、現在まで調査の例はなく、その時期、性格とも明らかでない。蝦夷館については、最近、一戸町、浄法寺町など周辺の市町村でも確認されており、さらにその数は増加するものと思われる。以上の城館跡の保存についてはなお問題があり、軽米町軽米城、一戸町野田城・西方寺館のように、市街地化のために大半が破壊されたものもあるが、国指定史跡九戸城跡では、史跡公園化が図られている。

九戸城　二戸市福岡

九戸城跡は豊臣秀吉による奥州再仕置の最後の地、全国統一の締めくくりの舞台であり、日本史における中世は九戸城の落城をもって終了したといえる。こういった歴史的重要性、規模の雄大さ、遺構の残りの良さなどから昭和10年に国の史跡に指定されている。

〈位置と規模及び地形〉

馬淵川は岩手県の中央部、北上山地に源を発し青森県八戸湾にそそぐ全長120㎞余り、岩手県第2の河川である。九戸城はこの馬淵川の中流域、現在の二戸市の市街地右岸に形成された河岸段丘にある。南北500ｍ、東西750ｍの大きなＬ字形をしたこの城は、西辺を馬淵川（川床までの落差約20ｍ）、北辺を馬淵川の支流、白鳥川（同15～20ｍ）、東辺を白鳥川の支流、猫淵川（同15～20ｍ）によって各々遮られており、それぞれ傾斜角45度以上の断崖となっている。南側は松の丸外側の空堀（幅25～40ｍ）と二の丸外側の空堀（幅40ｍ、深さ10～12ｍ）が切られている。

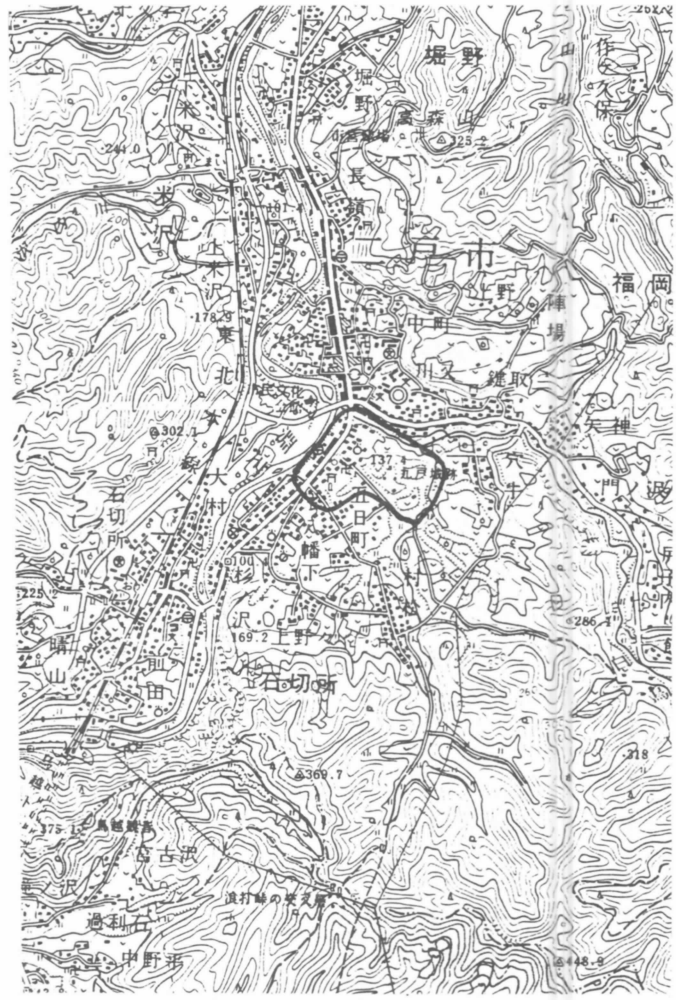
また、この城を乗せる河岸段丘は、三の丸を乗せる標高105～110ｍの中町段丘と本丸、二の丸、石沢館、若狭館、松の丸を乗せる標高130～135ｍの福岡段丘の2面あり、後者に伴う段丘崖はそのまま本丸と二の丸の西壁、本丸、二の丸、石沢館の北壁に用いられている。

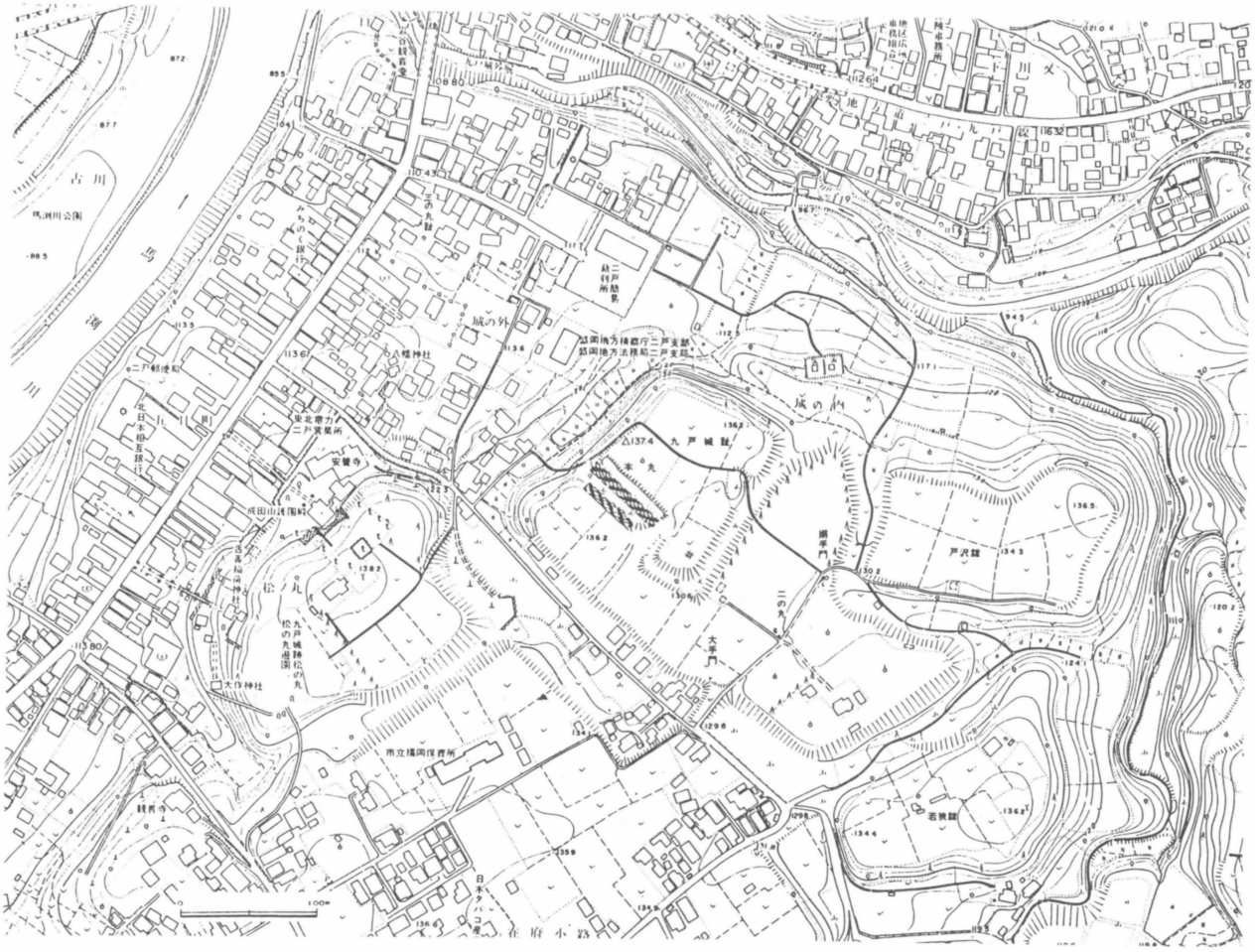
このように九戸城は合流する3つの河川を外堀とし、これら河川によって形成された段丘面や段丘崖を郭の構成に組み込むなど、浸食地形を最大限に生かした築城であり、中世的特色の強い総面積34万㎡（指定面積21万㎡）にも及ぶ広大な平山城である。

〈遺構〉

①本丸跡

中央部に位置しており1辺が100ｍ前後のほぼ正方形の郭である。最近まで農地であったが、現在は全域の公有地化が完了している。しかし、環境整備のための発掘調査はまだ実施されていない。本丸とこれをＬ字状に取り囲む二の丸の間は幅10～18ｍ（上場）、深さ3～5ｍの空堀となっている。安永5（1776）年の絵図によれば、この堀は全部両面石垣積みとなっているが、昭和初期に土木工事用に大量に抜き去られており、現在は南面の約60ｍ、面積にしておよそ500㎡を残すだけである。石は1～2尺であまり大きいものは無く、野面積みであるが、崩落したもののなかには矢穴のみられるものもある。東面の北側には追手門跡があり10ｍ四方の桝形になっている。南面にも入り口の隅欠がある。北面の一部から東面及び南面の一部にかけて約200ｍにわたり、堀に沿って石垣を伴った高さ1.5～2ｍ、幅2～2.5ｍの土塁が築かれている。南面の堀の内側は高





さ２～2.5ｍ、上場の幅５～６ｍの土塁となっている。この土塁の東隅に一段高く広い平場があり隅櫓跡といわれる。本丸の南東隅には井戸跡があり戦後に好事家により堀られており、その際、キセルの雁首が出土したという。深さ６～７ｍで現在、季節によっては多少の水をたたえている二の丸の間との堀跡の底より２～３ｍ低いことになる。本丸、二の丸の西面の真下は幅20ｍほどの腰郭となっている。

②二の丸跡

三の丸に次いで面積が大きく３万１千㎡に達する。空堀を隔てて本丸をＬ字形に取り囲む郭で、本丸との間の堀に面した部分及び北側の僅かな部分を除いた外周には600ｍにわたり高さ1.5～２、幅1.5～２ｍの土塁が築かれている。現況は畑、牧草地、宅地などとなっている。耕作中に石臼が出土している。

③三の丸跡

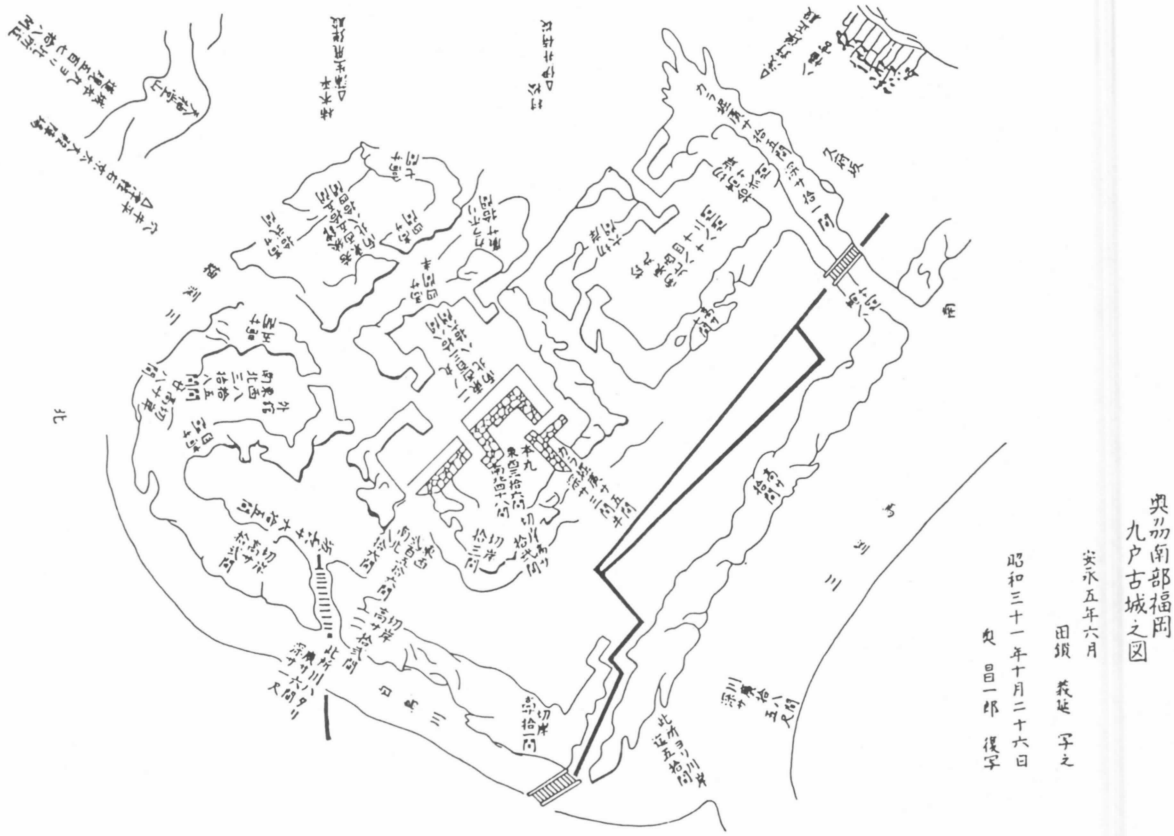
最大の郭で、およそ10万㎡にも及ぶ。この郭は南北に旧奥州街道（旧国道）が縦断しており市街地化が著しく史跡指定区域から除外されている。この郭の西側と北側、南側の縁辺（城の外郭西半分）には大規模な土塁（幅２～７ｍ、高さ２～５ｍ）が築かれていたが、現在は部分的に70ｍ程を残すだけである。最近まで西南隅の土塁の屈曲部が残っており、ここから旧街道までの間の地区は「橋場」という字名で、この付近で土塁が途切れ空堀に橋がかかっており、城域南端の入り口であった。この土塁の屈曲部付近に現状変更に伴う緊急発掘調査（昭和57年度）が実施されたが、版築状構造が確認され、その下位から16世紀末期の美濃の天目茶碗が出土している。古図によれば、旧街道は橋場の橋を渡り三の丸に入り三の丸の北側で西（左）に折れ「左羽内坂（さばないざか、通称：馬助坂＝マスケザカ）」を下り白鳥川にかかった橋を渡る。この他にも二の丸から搦手門を抜け三の丸を通り北側の崖を斜めに降り、白鳥川の別の橋に至る道も残っている。

④石沢館（外館）跡

城の北東隅に位置し二の丸とは幅30ｍ、深さ５～７ｍの空堀で隔てられている。平面形はほぼ東西に長い方形（120×70ｍ）である。地上には特に遺構は残っていない。現況は畑である。

⑤若狭館跡

城の東南隅に位置する郭で規模は石沢館とほぼ同じおよそ９千㎡（120×70ｍ）である。西側は二の丸、北側は石沢館と各々幅30～50ｍ、深さ７～10ｍの空堀で隔てられている。上面は二の丸や石沢館と異なりかなり起状がある。東側、猫淵川との間幅30～40ｍ、長さ100ｍほどの腰郭となっ



ている。この腰郭と若狭館上面とのレベル差は約15m、猫淵川とのレベル差は16mである。現況は畑であり、東側の耕作土から焼土とともにフイゴの羽口が出土している。

⑥松の丸跡

城の南側に位置するこの郭は九戸城の別郭ともよばれる。

九戸城落城の後、城の一部を修理し南部26代信直が三戸城から移り住み、慶長4（1599）年盛岡築城までの間、7年と数ヶ月居城としていたという。その居城が松の丸である。

東西100m、南北およそ160mの方形にちかいプランで北側は幅50mの空堀で二の丸と、東側は幅20～25m、深さ6～8mの空堀で城域外の在府小路と、南側は幅25m、深さ10～15mの空堀で城域外と隔てられている。東南に隅欠があり在府小路からの入り口となっている。この入り口を挟んでW字形に屈曲する全長130mの土塁（幅1.5～2m）が築かれている。西側6～7mほど下位、三の丸との間は幅20m長さ200m程の腰郭となっており、戦前まで県社であった呑香稲荷神社や成田山安養寺など寺社の境内となっている。指定地内の現況は児童公園、墓地、畑となっている。

⑦大手門跡

二の丸と松の丸、在府小路との間は幅50m（下場）、深さ12～15mの大規模な空堀で隔てられているが、西側（三の丸側）から200m程の所で一旦途切れており、幅10m程（上場）の土橋を境に急に狭まり（幅30m）若狭館の堀へと続いている。古図によればこの土橋が大手門跡である。現在、堀跡には市道が通っており、これによって土橋の一部が切られている。現況は畑である。門の外側は在府小路である。

⑧搦手門跡

二の丸の北東隅、空堀を挟んで石沢館南西隅の真向かいにある。二の丸から堀へ下りる径となっている。

⑨在府小路遺跡

九戸城と極めて密接な関連を持つ遺跡である。

南部利直が松の丸を居城としていた時期の武家屋敷群があったところで、東西400m、南北300mの広大な遺跡である。現況は大部分が畑で一部宅地、幼稚園などとなっている。

過去、耕作の際何度か石列が出土しており、武家屋敷に伴った排水路と思われる。九戸城の大手門と松の丸入り口のどちらからも正面にあたる。九戸城と同じく東側を猫淵川で遮られ、南側は猫淵川にぬける空堀（現在20数m程を残す）で切られ、一つの郭の形をなしている。

〈歴史〉

九戸城には白鳥城という別称もあることから（白鳥川の上流には白鳥館という館跡もある）安部頼時の子則任が築

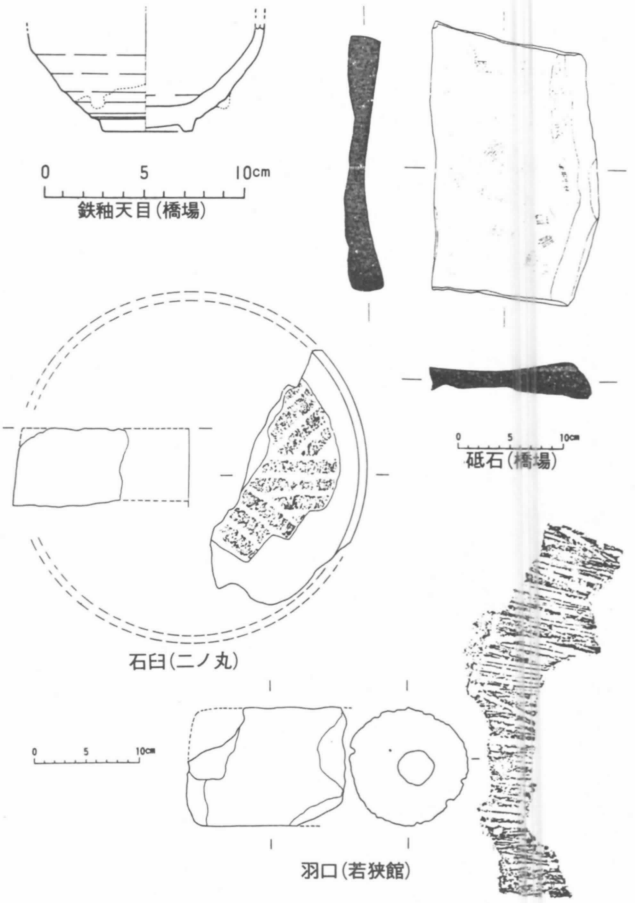
三の丸跡
石沢館跡
堀跡
城の内
本丸跡
二ノ丸跡
九戸神社
九戸城
本丸・二の丸
田分
田口
田東
鈴木
市道大手先線
0 10 20 30 40 50 100

安養寺
成田山
佐藤
堀跡
福岡保育所
松の丸
松の丸跡
松の丸遊園
松の丸
九戸城
吉香福岡神社
福岡文庫
大作神社
0 10 20 30 40 50 100

城したという説が地元にあるが裏付けとなる文献は無い。「岩手県史」、「二戸郡・九戸郡古城館址考」、「日本城郭大系」では、一戸町実相寺（嘗は九戸城付近にあった）の古文書から、九戸政実の４代前の光政が明応（1492～1501）年の頃に築城したものと推察している。

南部一族内の勢力を南部26代信直と２分していた九戸政実は、宗家の世継ぎ争いから26代信直と対立、抗争。天正19（1591）年、豊臣秀吉が差し向けた奥州再任置き軍と攻防の末に落城し、政実以下の重臣は現在の宮城県栗原郡栗駒町に於て処刑された。

同年12月信直は蒲生氏郷によって大修理された九戸城に三戸城から移り、盛岡城が築城成るまでここで藩政をとった。信直の没後、27代利直は長子経直を城代として九戸城に置き、元和２（1634）年代官所を設置し、寛永11（1634）年九戸城は廃城破却された。

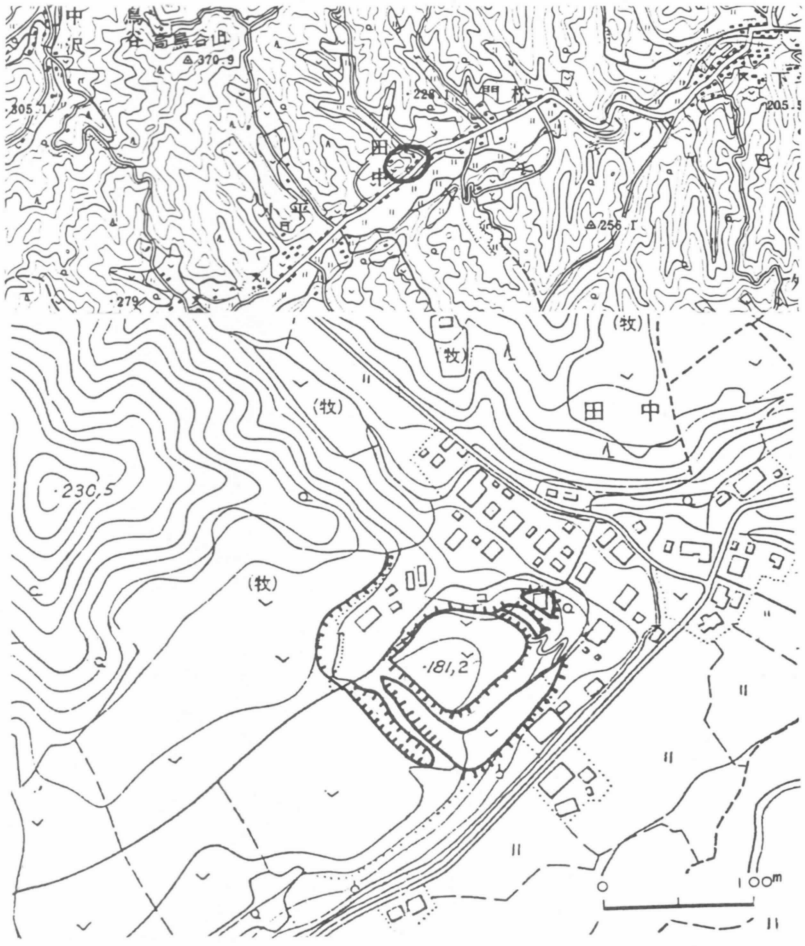


釜沢館　二戸市釜沢道ノ上

青森県境まで僅か400ｍ、旧陸羽街道沿いにある釜沢部落を北に見降ろす馬淵川左岸の小高い河岸段丘上にある。釜沢館（本城）と常楽寺館（古館）の東西２郭からなり、間は自然の沢を利用した堀で切られ、堀の開口部には館主小笠原家の菩提寺である金峰庵（常楽寺）がある。この堀は幅30～40ｍ（下場）、深さ25～30ｍ、長さ160ｍで本城側には最大幅15ｍの腰郭があり墓地となっている。両郭は果樹園、堀の底は水田である。本城西側も同規模の空堀が切られ小規模な腰郭がある。南側も空堀で背後の斜面を切っている。本城には３段の整地面があり上段に祠が祭られている。本城は東西70ｍ×南北160ｍの規模である。古館は本城とほぼ同規模で本城との間の堀側に小規模な腰郭が認められる。東側は沢で切られ、沢沿いの径から郭へ上がる坂道がある。小笠原（釜沢）氏は九戸政実の叛乱に加担し南部信直に討伐されたという。

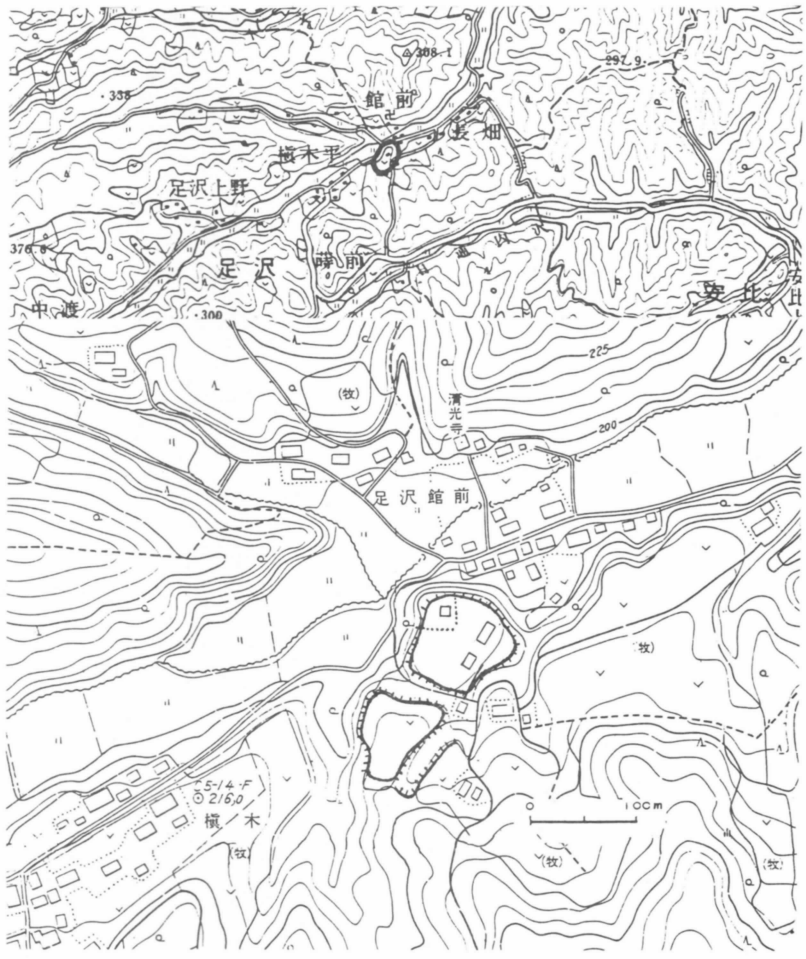
田中館　二戸市上斗米田中

馬淵川の支流十文字川の中流域、下斗米から川代へ至る道と下斗米から金田一川を経由して田子に抜ける道の分岐点にあたる。田中部落を見降ろす台地上、発達の悪い河岸段丘の一角を堀で囲った館である。南面及び東面は段丘崖、北面と東面は連続する堀で切られている。現況は牧草地、畑、宅地などとなっている。堀の北側は幅40mほどで農家が建っている。堀の西側は北側より一段高くなっており、幅は下場で20m程である。この部分は底に高さ２～３mの土塁が縦走しており二重堀となっている。主郭部の南側下位には幅10～20mの腰郭があり、西側の二重堀の内側へ続いている。主郭部はやや東側に傾斜しているが造成による段があり２段となっているが館跡に伴うものかどうか不明である。東側にも15m四方の腰郭がある。主郭上面までの比高は15～20mである。口伝によれば館主は田中館正孝といい150石取りだったという。



足沢館　二戸市足沢字若宮

上斗米から御辺地へ抜ける交通の要所、足沢部落にある。馬淵川の支流足沢川によって形成された峡谷に突出した丘陵を空堀で切り館としている。この館の北側眼下には足沢館前部落があり、部落を挟んで谷の反対側には清光寺という臨済宗の禅寺がある。足沢氏の菩提寺で墓もある。東西50～70m×南北200m。中央を東西に横切る幅20m、深さ７～９mの空堀があり２つの郭に別れている。この堀から北側の郭に上がる径が有り、その先に民家がある。地主、足澤松雄氏宅で、氏は館主足沢氏の末裔であるという。郭の上は畑であるが、北西隅に30m四方の林がありその中に八幡宮の堂宇と岩鷲山の石碑、駒形神社の石碑などがある。館主は代々足沢氏であったが、九戸政実の乱の前後に南部信直が政実を牽制するために浅野長政の家臣、浅野庄左衛門重吉を配したという。

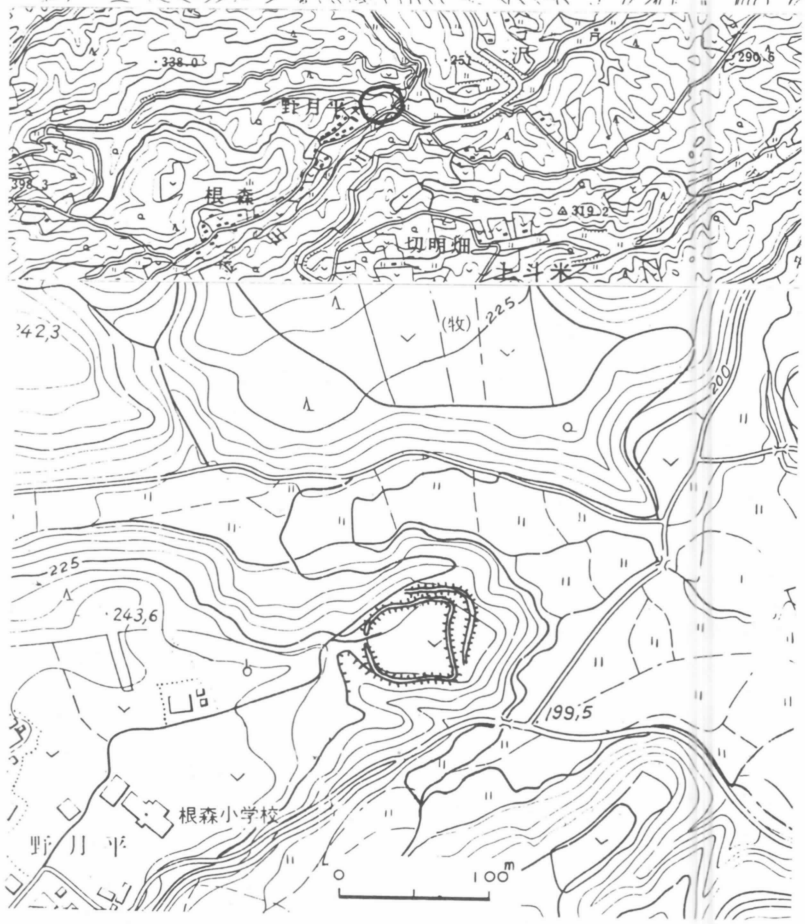


米田館　二戸市上斗米字米田

馬淵川の支流十文字川の上流域、上斗米から川代へ至る道と足沢へ至る道の分岐点、十文字川と足沢の合流点に位置する。交通の要所であり、1km程西に本田館、同じく1km南に足沢館が有る。十文字川に付帯する河岸段丘を利用して築かれている。比高20～25m、総面積75,000㎡（750×100m）の東西に長い大規模な館跡である。現況は畑、山林。北面は段丘崖、東面は足沢川の渓谷、西面は沢に手を加えた堀で切られている。南側は急峻な山の斜面である。4つの郭から成っており、各郭は幅50m前後の三本の堀で隔てられているが、地形からみて、このうち少なくとも中央の1本は自然の沢を用いている。東側の2つの郭は各々25,000㎡、西側2郭は夫々10,000㎡である。堀以外に遺構らしいものは見当らないが、東端の郭北側崖を降りる径がある。文献、口伝は皆無だが地主は館と呼んでいる。

根森館（チャルス台）二戸市上斗米字根森

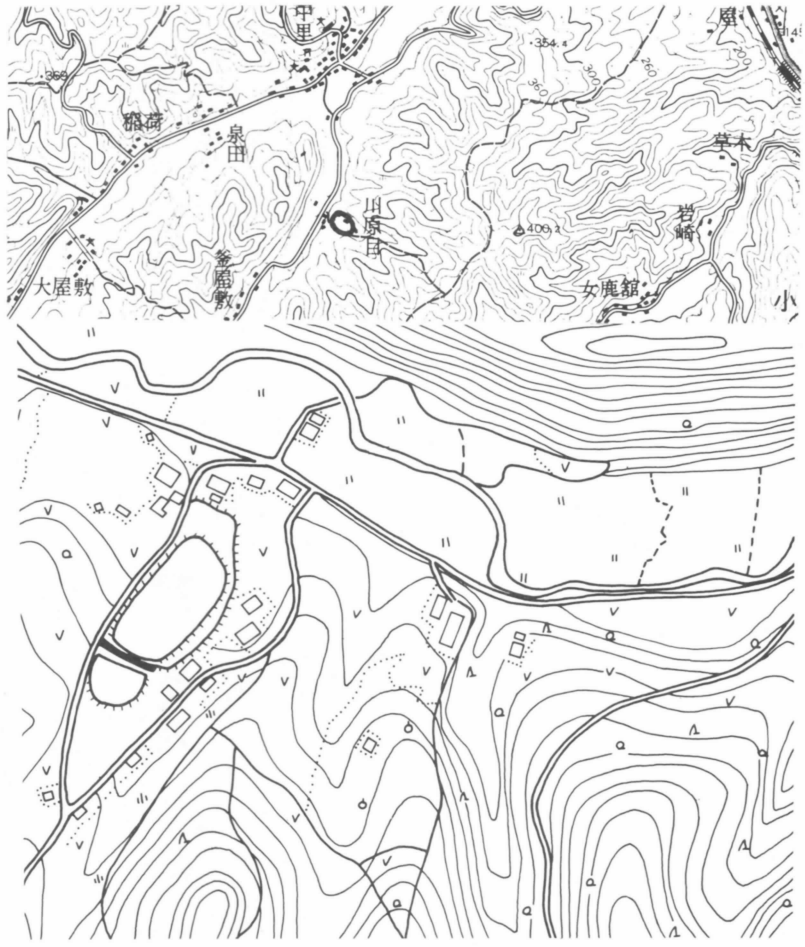
馬淵川の支流金田一川の上流域、金田一川本流とこれに合流する支流の間に挟まれた細長い大地の先端を堀で切り、つくられた館である。比高30mで、田子への道、上斗米への道、根森部落への道が一望できる眺望の良い場所であり、同時にこれらの分岐点も間近で交通の要所でもある。台地を南側からえぐるように切る空堀は自然の沢を利用したものと思われる。台地から館跡に入るには人一人がやっと通れる幅の土橋状の径を通る。郭部分の大きさは50m×50mで平面形は方形である。ぐるりに幅1mの土塁が築かれており、西側の土橋の正面だけが3～4m途切れている。東辺と北辺には幅4～6mの帯郭様のテラスがあり、テラスの縁にも幅1～1.5mの土塁が築かれている。また、土橋を渡ったところからテラス北側に至る道がありさらに台地の北側に降りる道に続いている。「チャルス台」という名称について梁部善次郎氏は「チャシ」の転化したものではないかと推定している。



小友館　二戸郡一戸町小友字下川原目

小友川沿いにある小友地区の入口、川原目の集落内に位置する。700m離れた北に中里館、山を隔てた二ツ石川沿いには月館城がある。館は東西103m、南北36mの東西に長い単郭で、東端に幅８ｍ、深さ４～５ｍの堀が残り現在は道路となっている。郭の北側と西側は３～４ｍ低くなり腰郭状の平場があり、北側では幅10ｍ、西側で37ｍ程になる。この腰郭状の平場のうち北側の平場は堀跡の可能性が強く、そのまま西側まで続くものと思われる。

館の東端の堀を隔てた対岸に広場があり、上を削平されその周囲は崖となっているが遺構は確認できなかった。築城者、時期ともに不明であるが、戦国時代末期には月館城主月館右京の弟左京の居館だとも伝えられるし、一説には浄法寺氏一族の居館とも言われている。周辺には釜屋敷、半在家、後友などの地名や館という屋号を持つ家があるし、郭の東南隅には八幡神社の小祠がある。



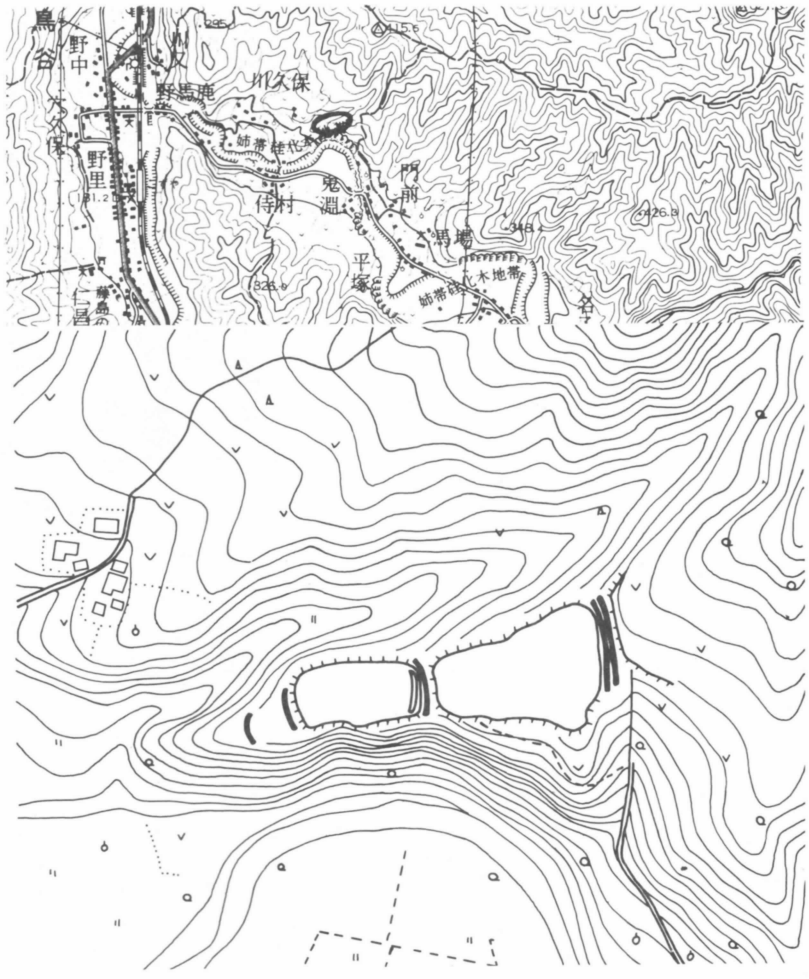
姉帯域　二戸郡一戸町姉帯字館

姉帯侍村の南東１kmの山地に位置する。馬淵川に面した南側は比高50mを越える急崖で、更に北側も自然の急斜面となっている。

この馬淵川と谷に挟まれた山地頂上の東西両端に堀、あるいは土塁を設け館を構築している。２つの郭があり、西側が130×60ｍ、東側が120×100mで東西方向に並列している。堀は郭の間が最も大きく幅、深さとも20ｍを測るが、西側の郭ではこの堀に幅２～３ｍ、高さ3.5ｍの土塁を伴なっている。山地へ連続する東側にも二重堀があるし、更に西側で幅が狭くなる尾根にも堀があり郭を区画している。

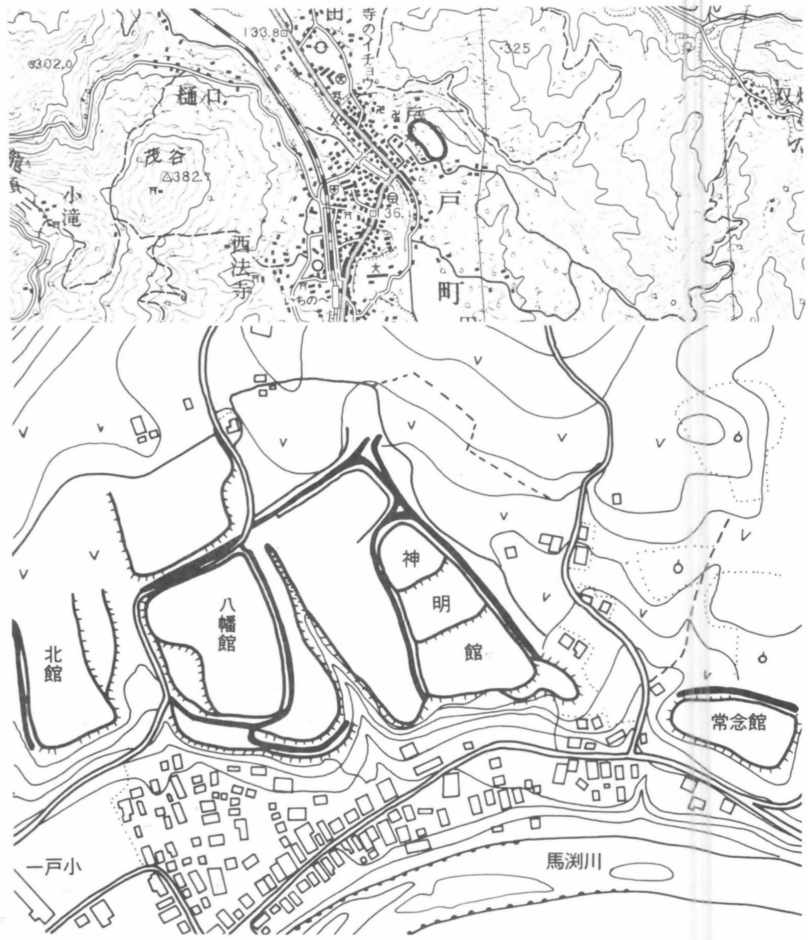
城主は九戸南部氏の一族である姉帯与次郎兼政（姉帯大学）で、弟の五郎兼信とともに九戸の乱では姉帯城に篭城し討死している。

周辺には侍村の他、門前、馬場、館という地名や中世末期の宝篋印塔が馬場に２基残っている。町内でこのような大規模な土塁や堀を残す館は他になく、集落から離れているため保存状態も良い。



一戸城跡　二戸郡一戸町一戸字北舘、大沢

一戸町の中心部である旧一戸町の市街地東方に位置している。旧一戸町とその周辺は、南北に標高300～400ｍの山地がせり出し盆地となっており、その中央を馬淵川が蛇行し両岸に谷底平野と洪積世の段丘がひろがり背後が山地となっている。市街地は谷底平野を中心に南北に連なるが、この市街地との比高20～25ｍの東側の段丘面が城となっている。標高165～170mのこの段丘は火山灰性の段丘で、幅は300～500ｍ程あり南北に長く分布しているが、ところどころ東西に開析され小谷となっており、この自然地形を巧みに利用して城を構築している。典型的な平山域で、南北700ｍ、東西300ｍの広大な面積を有し、その間に北から北館、八幡館、神明館、常念館が南北に並列し、更に八幡館と神明館の東側にも郭が続き５～６の館により構成されている。



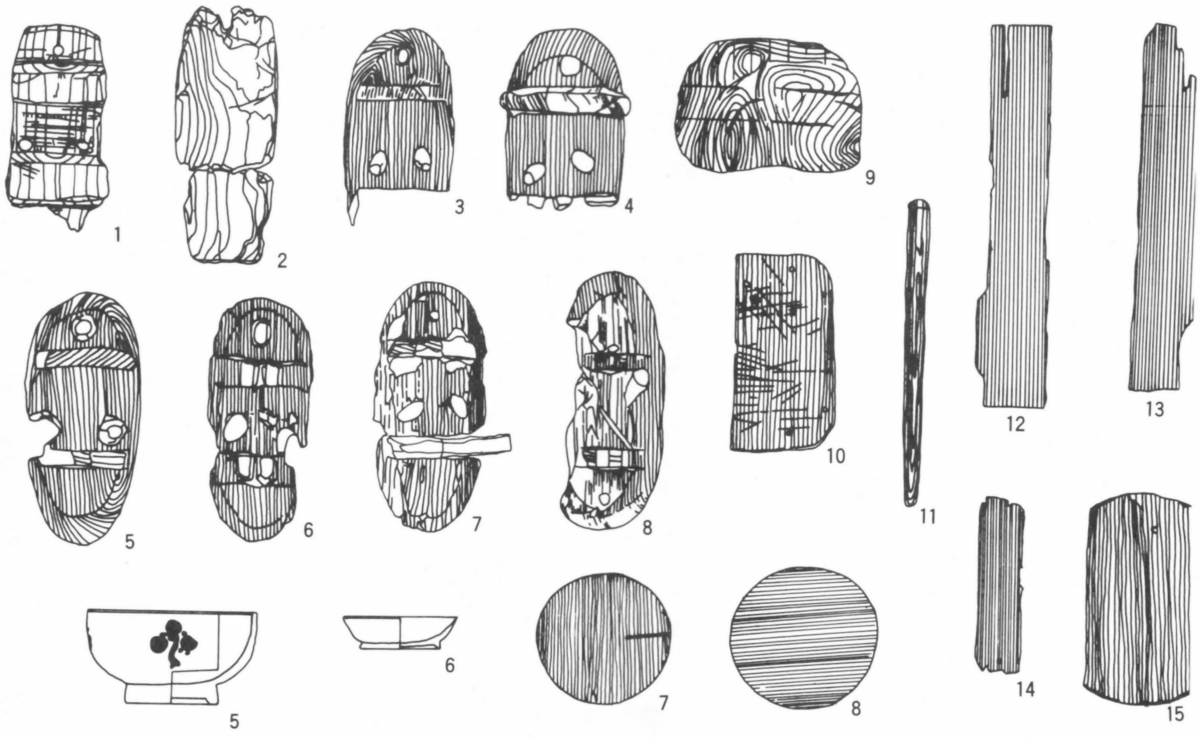
各館は、北館が41×130ｍ、八幡館が93×131ｍ、神明館が85×160ｍ、更に八幡館の東側の館が70×130ｍで、いずれも東西に長く、逆に常念館は70×35ｍと南北に長い館で、更に神明館の東側には、径40ｍの正方形を呈する小規模な館があり、しかも北側は緩やかな斜面となりそのまま北側の小谷まで続いている。

以上の館のなかで北館、八幡館、神明館には比高２～５ｍの一段低い腰郭状の平場がついている。北館、八幡館は南側で、幅10～30ｍ、神明館では北側にあり、幅40～50ｍの平坦面となっている。特に神明館の北側にある平場は、そのまま東側の館まで続いている。以上の腰郭状の平場の他に西端に位置する館の西側（段丘崖）には幅５～10ｍの小規模な平場が段状に続いている。各館は自然の谷と部分的に残る堀により区画されているが、堀は北館の北側の堀が最も大きく幅20m、八幡館の東側が幅12～17m、神明館の東側と更に小規模な館の東側にある堀は幅10mで、３～５ｍの深さとなっている。以上、一戸城は、現状では自然の谷と堀により区画された５～６の館から構成され、全体として南北に長い連郭式の城館址として把握する事ができる。

ところで一戸城は県内の中世城館址でも広範囲に発掘調査を実施した城館址のひとつで、最近まで多くの成果を得ている。発掘調査は、昭和54～55年に実施した国道４号線一戸バイパスの事前調査として実施したのがその端緒で、北館の一部と八幡館、神明館の東側の館とその周辺の堀を

対象とし、城内の東側を南北に縦断するように調査している。更に道路開通後城が市街地に近く位置するため、周辺が開発地帯と化したためそれに対処するための調査を昭和57年から実施しており、今年度で４年目となる。以上の調査結果は次の通りである。

城の主要な郭と考えられる八幡館、神明館、更に常念館の平場は未調査であるが、神明館、八幡館の東側の館で掘立柱建物跡、竪穴などの建物群を検出している。建物のなかでは掘立柱建物跡がその中心をなすもので、掘立柱建物跡の周囲に竪穴が配置され建物群が構成されている事が判明した。掘立柱建物跡のなかには梁行３間、桁行５～８間

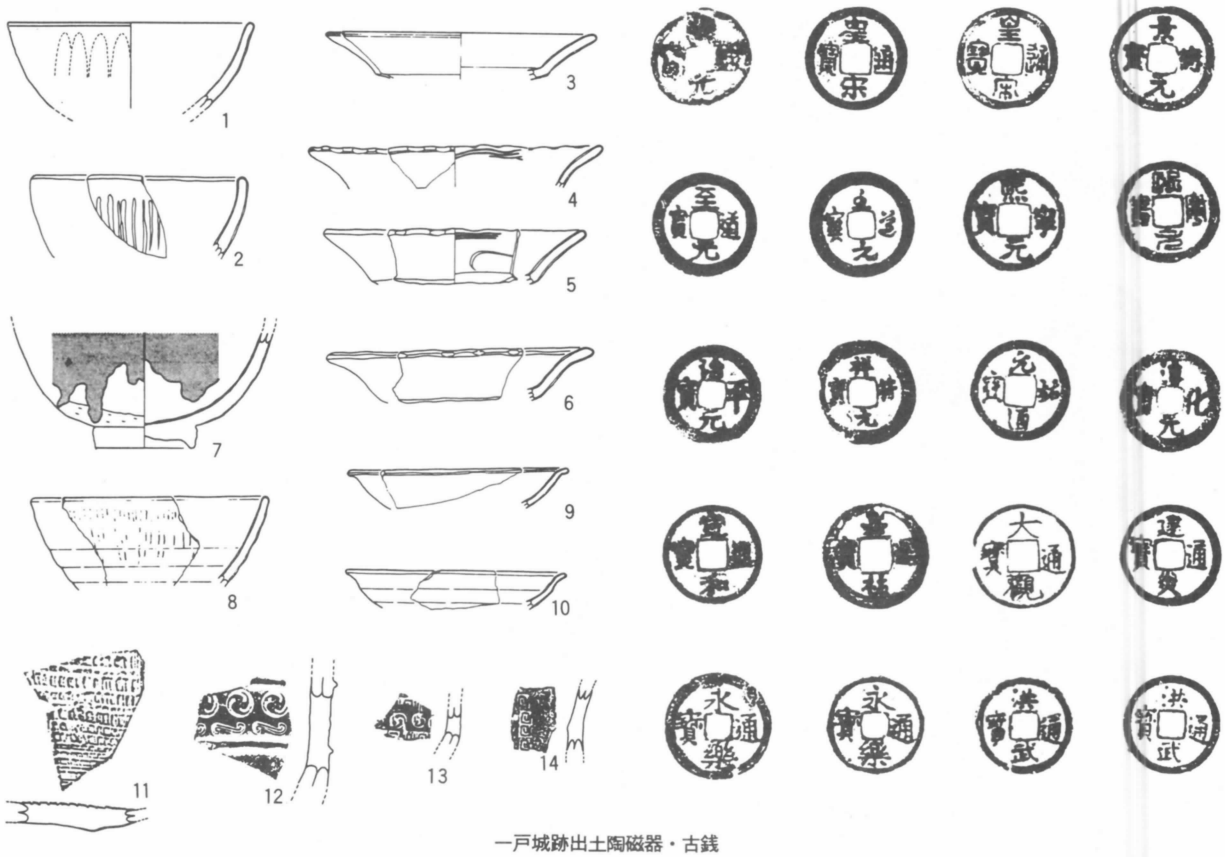


一戸城跡出土木製品

でしかも廂の付く建物群と、梁行１～２間、桁行１～３間の小規模な建物群とがあり、前者が各館で主体的となる建物で、家臣などの居住用の建物と考えられるし、後者がそれに付属するものである。後者の用途は推定となるが、あるいは櫓などの建物と考えられるものもある。居住用の建物には、桁行８間に更に３×３間の張り出しが付き、更に四面廂となる建物も検出されている。

掘り込みを伴なう建物である竪穴は、その規模は２～５mと居住用の掘立柱建物跡より小さく、その形態は方形で不規則な柱配置となる。しかも昭和58年の調査で柱穴の中から未加工の柱がそのままの状態で出土した。以上から建物は粗雑なつくりで、しかも梁行１～２間の建物同様居住用建物に付属する建物と考える事ができる。このような竪穴の中からは、多量の炭化した穀物や石臼、鎧金具がまとまって出土しており倉庫、あるいは作業場等に使用されたようである。このような遺構は、館の上だけでなく八幡館、神明館の腰郭状の平場にも広く分布する事が最近の調査で判明しているし、この腰郭状の平場と各館との間には堀がめぐっている。全体として堀は城の外側が大きく、城のなかをめぐる堀は比較的小規模なようである。調査では、以上の遺構が各平場で重複して検出されているし、更に同じ性格の建物どうしが重複する例が多く、各平場をめぐる堀も走行を異にして重複する例もある事から、城がかなり長期にわたって使用され、しかもある時期には大規模に改造をしているようである。

遺物も豊富に出土している。陶磁器、木製品、金属製品、石製品で、特に木製品（実測図）は、当時の生活の様相を如実に示す貴重な資料となっている。いずれも堀からまとまって出土しているが、下駄（１～８）、漆器（５～６）、錐の柄(11)、折敷(10)、曲物の底板（７～８）、製作台（９）、板材(12～15)、ヘラ状木製品などの種類がある。特に下駄が最も多いが、形の揃ったもので10点程ある。形態から台部と歯を一木から作った連歯下駄（１～２）と、台部と歯を別々に作った差し歯下駄（３～８）があり、連歯下駄は方形、差し歯は楕円形を呈している。１を除き成人用の下駄と考えるが長さは21cm程であり、現在の女性用下駄より幾分小さい。材質は、連歯下駄がマツ、ケヤキ、差し歯下駄は台部がホウノキ、歯はキハダ、ケヤキである。漆器は、５の椀、６の皿更にヘラなどで、椀には松を模した文様がついている。



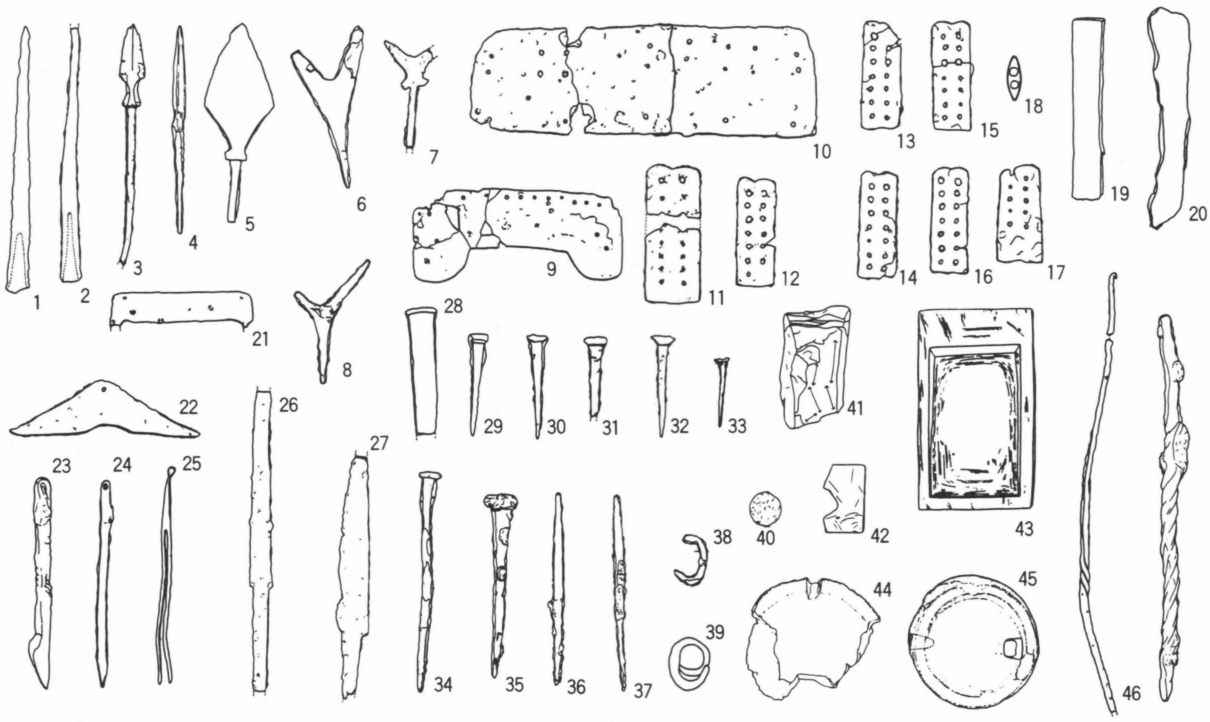
一戸城跡出土陶磁器・古銭

木製品と同じく日常の生活用具である陶磁器（実測図）も多い。舶載品と国産品があるが城の存続期のものとしては圧倒的に舶載品が多い。いずれも中国産の青磁（1～6）が大半を占め、同じ中国産の白磁、青花、赤絵、褐釉陶器（7）も含まれる。器種は碗、皿が圧倒的に多く、稀に壺の破片も含まれている。国産品には、瀬戸、美濃産（8～10）の陶器が主体を占め、同じく日常の用器である碗、皿が多いが、なかには茶器である天目茶碗や無釉の香炉、火鉢なども出土している。以上の陶磁器は、その使用年代から城の存続時期を推定する事ができる。

金属製品は、銅、鉄、鉛でつくられるが、大半は銅製品、鉄製品である。銅製品では渡来銭が最も多く100枚以上を数える。その中で北宋銭が主体を占め、次いで明銭、更に唐銭、南宋銭も含まれる。かんざし(実測図)、鎧の綿歯の留金(同)も銅でつくられている。鉄製品(同)は、合計200点近く出土しているが、城館址特有の武具、建築用具、労働用具などで、武具には鏃(1～8)、刀(20)、鎧金具（9～17)、建築用具には釘（29～37)、鏨(28)、労働用具には針(23～24)、締金具(38～39)、火打金(22)、オヒキ金(21)、紡錘の軸棒(46～47)がある。オヒキ金とは、麻などの植物から繊維を取り出す道具で、更にその繊維によりをかけて糸にするのが紡錘である。鎧金具としては、小札の他草摺の裾板(10)、脇板(9)などの優品も出土している。

石製品（同41～45）は臼(45)、砥石(42)、硯(43)で、臼は粉挽き臼で砥石とともにその数は多い。その他手洗鉢、あるいは搗き臼に類似した石製品も出土している。鉛製品は、鉄砲玉（同40）が1点ある。以上の遺物は、木製品以外は城内各地から出土するが、火災に遭った建物跡や堀の中からは当時の食糧である穀物が出土している。米、麦、大豆、小豆、ヒエ、ソバなどで、特に昭和59年度に調査した八幡館の西側の腰郭状の平場で検出した竪穴からは、大豆、小豆、ヒエ、籾、小アワが同じ竪穴からまとまって出土しており、竪穴が穀物の貯蔵庫としても使用されていた事を示す好資料となっている。なかでも大豆、小豆、ヒエの量が多く、城内での多様な食生活を推定できる。

一戸城は、南北朝以降中世の糠部とその周辺を支配した南部氏の一族である一戸南部氏の居城である。一戸南部氏に関する文献資料は少なく不明であるが、近世以降の資料によれば鎌倉時代に初代行朝が野田城に居住し、2代目一戸摂津守義実が一戸館に移り周辺の二万石を領有して以降代々一族が居住したと言われているが、領主である三戸南部氏同様室町時代以前の資料は皆無でありそれを裏づけるものがない。室町時代になると三戸南部氏が抬頭し、糠部



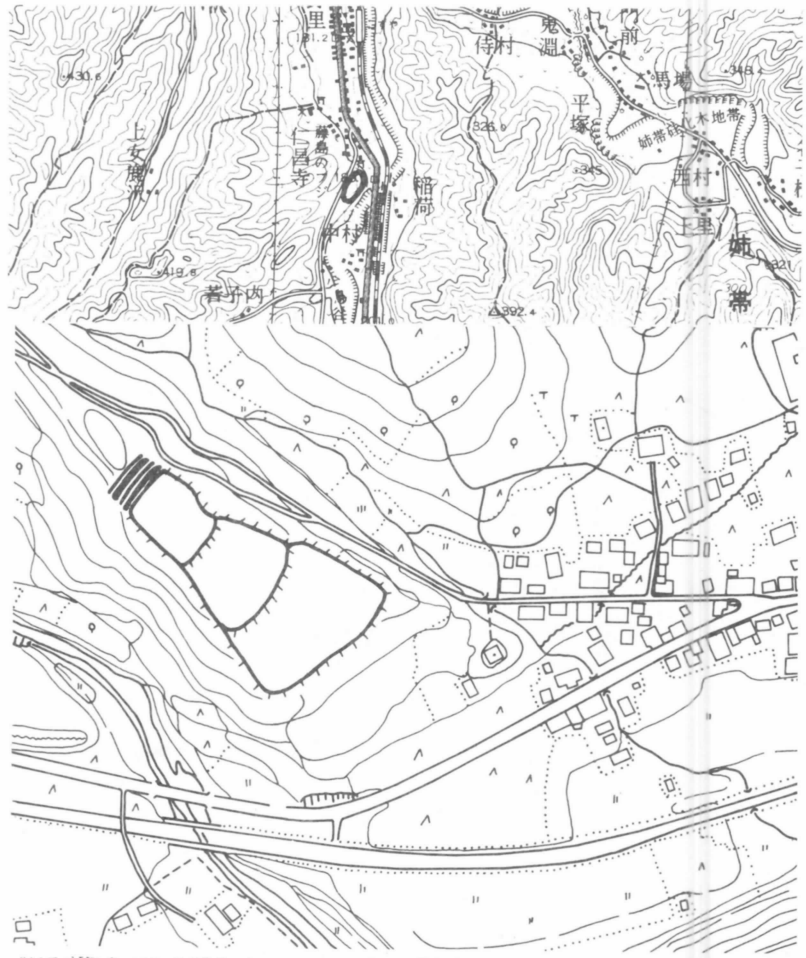
一戸城跡出土金属製品、石製品

郡はもちろんその周辺にまで勢力を拡大するが、同じ頃一戸南部氏も各地に分族を出し、岩手郡西根田、閉伊、九戸郡東部、鹿角、津軽にも一族が分布している。しかしこの時期でも一戸南部氏の様相は不明であり、戦国時代末期になりようやくこの動向を知る事ができる。すなわち、天正9年（1581）に城主である一戸兵部大輔政連が弟で平館に居住していた一戸信州により、その子出羽ともども殺害され家系が断絶したという衝撃的な事件とその後の南部一族の内訌、つまり九戸政実と南部信直の確執により、一戸城も両陣営の争奪の対象となり、天正19年(1591)、秀吉の奥州仕置最後の争いとなった九戸城の攻防に先だち中央軍により攻撃され落城し、翌年廃城となった。以上が一戸城の歴史的背景であるが、数次の発掘調査では、出土した陶磁器、古銭の使用年代から15C～16C、特に16Cを中心とする使用年代が想定され、室町時代から戦国時代を中心とする城館址であることが裏づけられている。しかも検出した掘立柱建物跡、竪穴がいずれも重複し、堀にも新旧がある事から数回にわたって城を改築、改造をくり返している事が明らかになっているが、広大な面積を有する城内で各館がどのような性格をもつのか、あるいはどのように城が変遷したのかについては、今後の調査を待たなければならない。そして木製品などの遺物も豊富であり、重要な城館址のひとつである事は確実である。

五月館　二戸郡一戸町小鳥谷字上里

小鳥谷の集落の南端に張りだした丘陵が館である。館の南側は比高50m以上の急崖でその下を平糠川が流れ、北側にも比高20～30mの小谷があり、尾根に続く西側に幅10m、深さ6mの堀を穿ち館としている。平場は二段になり、上が65×40m、下が70×62mのいずれも不整の方形で、その比高は1.5mとなっている。下の平場東端には、幅10mの帯郭状の細長い平場が数段貼りついているがこの平場は東側からの攻撃を守る堀跡の可能性が強い。館は全面畑地で保存状態も良いが、西端に上水道の配水場があり一部壊わされている。

館の北東下に八幡神社、小谷を隔てた北側に中世から近世初期の仏像を持つ仁昌寺観音堂、阿弥陀堂、更に樹令千年の国指定天然記念物藤島の藤があるほか、館の北側下は旧奥州街道となっている。五月館とは延暦、弘仁期の遠田公五月に由来すると言われ、中世では九戸の乱で姉帯城に篭城した小鳥谷摂津の居館で、別名小鳥谷館とも言われている。



中里館　二戸郡一戸町中里字武道平

鳥海地区の二ツ石川と小友川は中里で合流し龍頭川となるが、この合流地点の東側の段丘面に位置する。3郭まで確認でき、中央正面に径40mの正方形の郭があり、その左右後方にそれぞれ郭がある。南側の郭は、径90×45mで東西に長く、北側の郭は、径65×55mと南北にやや長く、西側は中央の郭を囲繞する形となる。堀は、中央の郭と後方の郭を区面する他、後方の郭の東西方向にも残存しており、幅8～10mで、深さは2～3mはある。

館の東側は2～3m高くなり、更に上位の段丘へと連続するが上位の段丘と館とを区画する南北の堀は埋まったのか残存しない。

館は、戦国時代末には南舘玄蕃守、中里大弼、中里弾正等の居館であったろうと言われている。各平場から縄文土器、土師器、古銭、陶磁器を表採している他、周辺には武道平（ぶどうだら）、旗鋒（はたぼい）、高屋敷、馬場野の地名がある。対岸の集落内に二戸七観音巡礼のひとつである中里観音や中世期の室篋印塔がある。

月館城　二戸郡一戸町月舘字舘

二ツ石川東岸の段丘上にあり、館の西側下に泉田の集落が広がっている。南北200m、東西100mの南北に長い郭であるが、後方にも堀跡らしい箇所があり2郭となる可能性もある。二ツ石川に面した館の西側は、段丘崖となり、その南北両端に小谷が走り、比高10m程の同じ急崖となっており、段丘面の続く東側に幅7～8m、深さ2～4mの二重の堀を穿ち区画している。

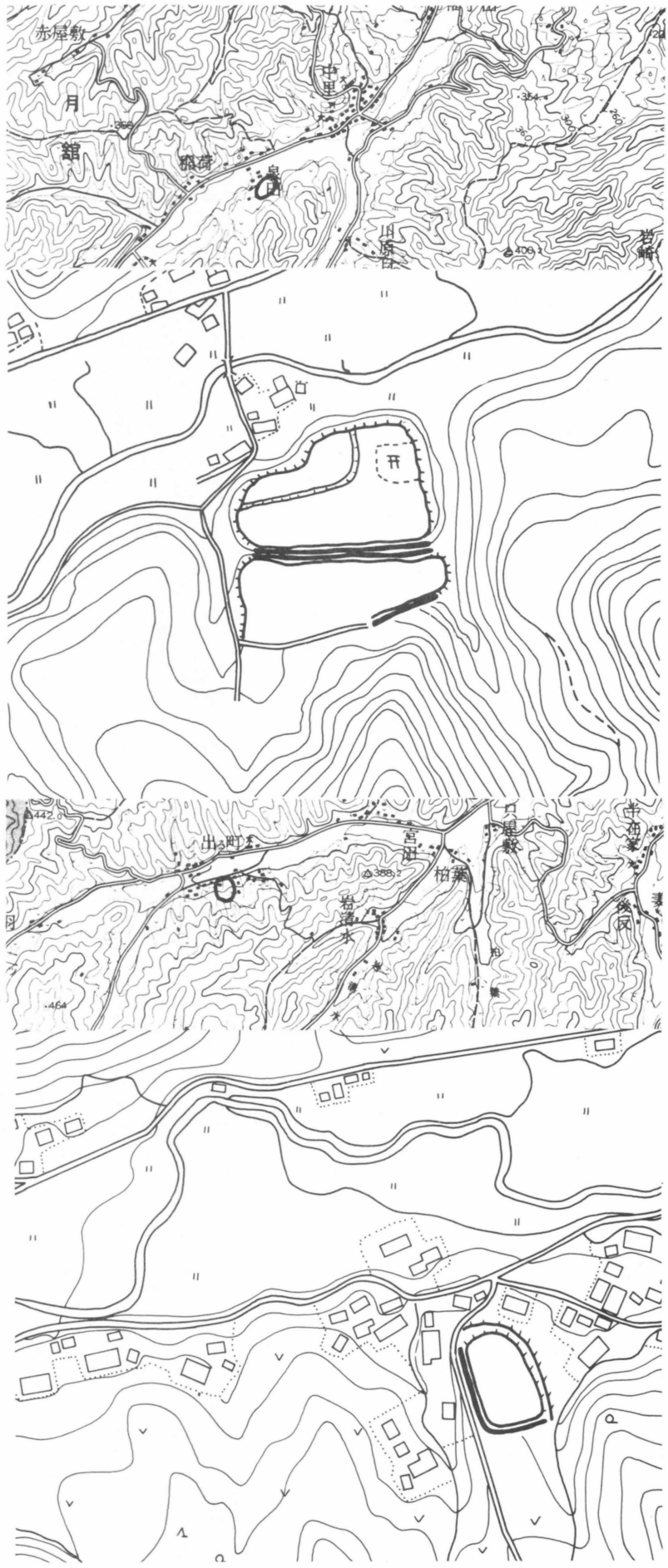
平場は比高1～2mの二段になっており、腰郭状の平場である下は寺屋敷と呼ばれ、上の平場には北側に八幡神社がありかっての寺跡だとも言われその裏手が墓地となっている。又平場中央に昭和初期まで井戸跡があったと言われるが今はその痕跡も無い。以上の腰郭状の平場と上の平場は堀で区画されている可能性が強い。

築城者、築城時期ともに不明であるが、代代月館氏の居城だったと言われ、戦国時代末期の居住者として月舘隠岐、月舘石京の名を散見できる。

出ル町館　二戸郡一戸町出ル町字出ル町

二ツ石川上流の出ル町の集落東方の段丘面に位置する。東西63m、南北40mの歪んだ方形の館で、後方の丘陵とは幅5.5m、高さ1.5mの土塁、幅10～12m、高さ4m程の堀とで隔絶しており、堀はそのまま南側まで続く。館の北側は、平場から2～3m低くなり、幅15m程の腰郭状の平場となり、この平場はそのまま東側まで伸びるが、ここも堀跡の可能性が強い。平場北東隅の土塁上に八幡神社の小祠がある。

築城時期は不明であるが、代々出ル町氏の居館と言われ、戦国時代末期に出ル町与次郎、あるいは出ル町将監が居住したと言われている。館の対岸1kmに中世末期から近世初期の宝篋印塔、同じ対岸の北側2kmに応永五年（1398）銘の宮田宝篋印塔（県指定文化財）がある。館の下にある民家は屋号を館と呼ばれ、北側には、近世中期開基の黄檗宗福寿庵があり、その周辺は寺屋敷と呼ばれている。



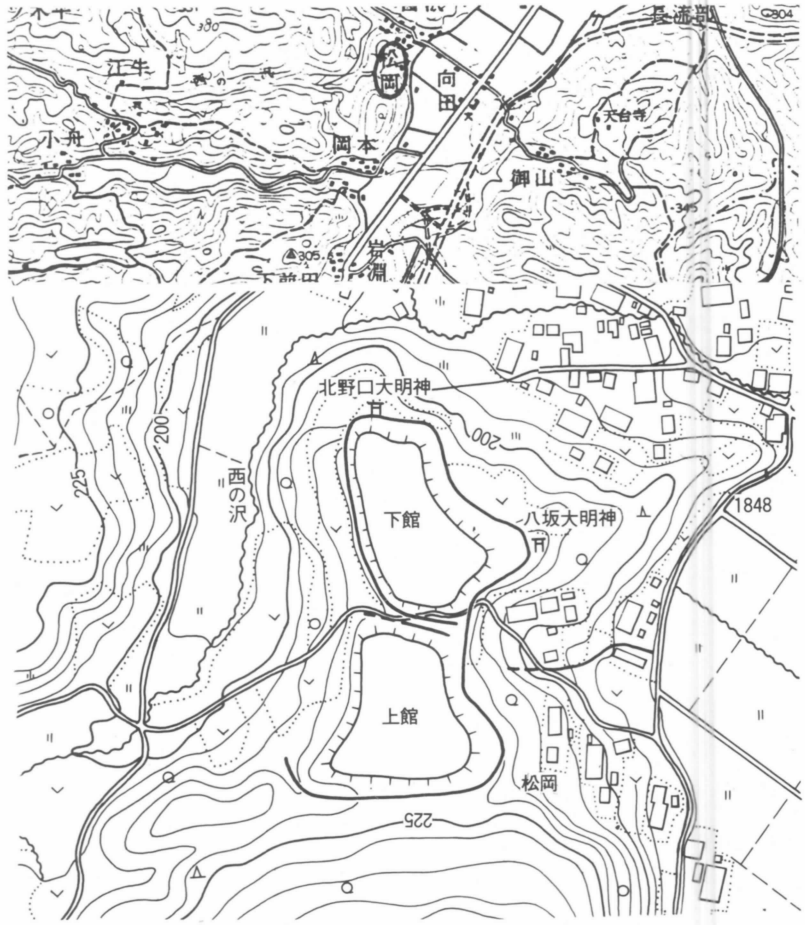
松岡館　浄法寺町大字漆沢字松岡

安比川支流の宮沢と西の沢の合流点の南に位置している。標高230ｍの台地上で、南を除く３方が比高40ｍの断崖絶壁の天険の地を利用している。

館跡は南北に連なる上館、下館の２郭からなり、中央部は道が東西に走っている。上館は南が広がる東西60～100ｍ、南北約100ｍの長方形である。南は幅15ｍほどの空堀によって松岡山から分断され、東と北は空堀と同レベルの狭い畑が続いている。堀が巡るものとみられる。郭内は平坦で、牧草地となっている。

下館は東西約50ｍ、南北約100ｍの長方形をなす。前者同様に幅の狭い畑が連続し、北端と東端では幅15ｍほどの空堀が確認されることから、一巡する空堀跡と考えられる。郭内はほぼ平坦で、畑として利用されている。郭の外側では、北に北野口大明神、東に「千本槻」と呼ばれる八坂大明神が祀られている。

当館跡は『館持支配帳』によれば「松岡館300石、松岡尾張」とあり、代々松岡氏の本拠地と伝えられている。



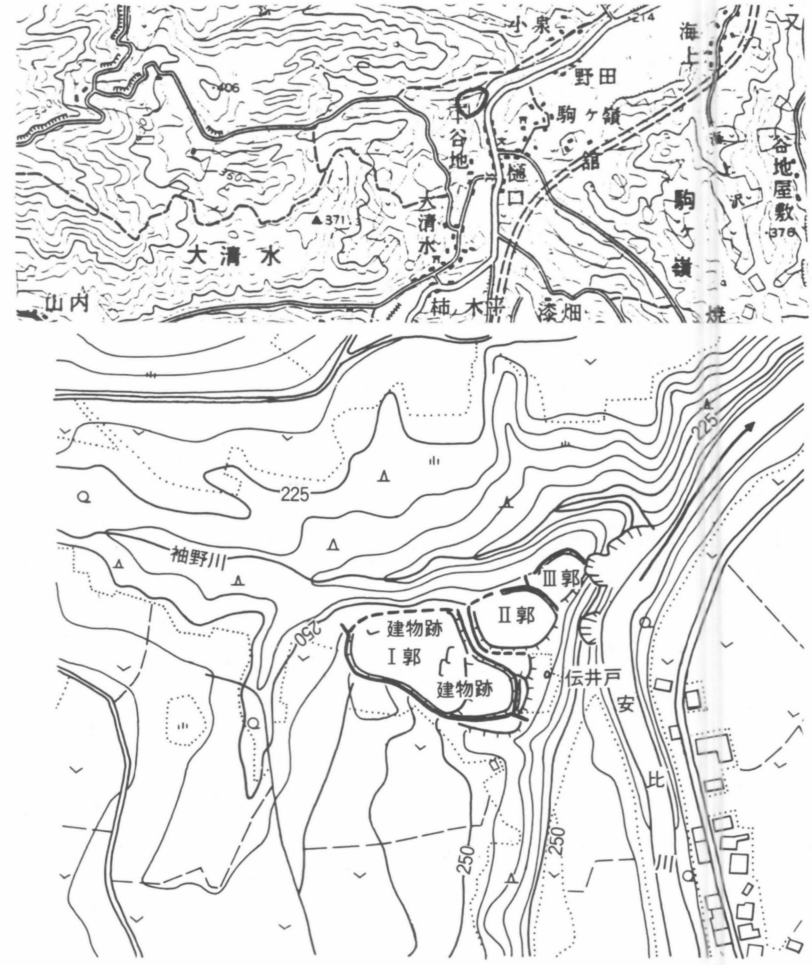
大清水館　浄法寺町大字大清水字下谷地

安比川左岸の支流袖野川との合流点に位置する。標高250ｍの台地上で、東と北が比高30ｍの断崖絶壁で区画された天然の要害の地に立地している。

３郭からなっている。Ⅰ郭は東西約110ｍ南北約70ｍの最大規模をもち、順次小さくなる。一部不明な所もあるが、幅４ｍ前後の空堀が囲繞している。堀の内側が若干高くなっており、内側に掘り上げられたものようである。郭内においては平場の造成が認められないが、松林の中では建物跡と推定される10ｍ前後の矩形の平坦地が確認できる。

Ⅱ郭は東西約50ｍ、南北約40ｍの方形で、畑地造成によって平坦となっている。断岸を除いて堀が巡っている。Ⅰ郭とⅡ郭の間は二重掘であったようであるが、畑地となってはっきりしない。この堀の先の段丘崖中腹には井戸があったと伝えられている。

Ⅱ郭の北東部には東と北が堀に囲まれた東西約30ｍ、南北約20ｍの小さな郭が続いている。



浄法寺城　浄法寺町大字浄法寺字八幡館他

安比川の左岸で、北西から張り出す台地上に位置する。東西約400m、南北約700mの広大な面積を占め、浄法寺町随一の規模をなす。標高は240mで、北西を除く3方が比高40mの断崖絶壁をなし、天険の地に構築されている。城跡は南北に連なる八幡館、大館、西館、新城館の4郭からなり、八幡館と大館の間を鹿角街道が通っている。また、西に福蔵寺、南東部に神明社が配置されている。

八幡館は小字「八幡館」に所在し、東西約340m、南北約150mである。四周は断崖で南が安比川によって限られている。郭内は東と西に平坦地があり、南は幅が5～30mの小さな平場が続いている。現状は畑地で、白磁、青磁が採集される。北東端に大館稲荷大明神が祭祀されている。

大館は八幡館の北に接し、北と西に空堀が巡り、東と南は急崖である。西堀は2重になっており、2時期にわたるものと考えられる。当初は内側の堀で囲まれた方約130mである。南にも狭い畑が平行して続き、空堀が存在したようである。郭内は平坦で、古銭などが採集される。次に、西館の一部を取り込んだ外側の堀で囲まれた方約200mである。南東端に七波稲荷社が祀られている。

西館は大館の西に接し、『南部諸域の研究』の「中館」である。東西約160m、南北約200mで、円周に幅10mほどの空堀が巡っている。南堀は大館の西堀中央に取り付く形をなしている。この南には南北約50m、東西約130mの腰郭が付くが、大館の拡張によって2分されている。

新城館は大館、西館の北に接している。東西約300m、南北約250m～150mで方形館が斜めに接合した形をなす。北と西は幅5mほどの空堀が巡り、東は断崖になっている。郭内は平坦で畑として利用されている。

当城跡は浄法寺氏累代の本拠地である。14代重恒の代に南部守行の摩下に属し、25代重房の代に南部下臣となったと言われている。また天正19年（1591）の九戸争乱では南部氏に属し、『館持支配帳』では「浄法寺館、五千石、浄法寺修理」とあり、南部氏家臣の中では大身に属している。天正20年に破却されたようである。

蝦夷館　浄法寺町大字御山字長流部

長渡路と長流部の集落の中間に位置している。標高210mの平坦な台地上で、開析谷に面した丘陵先端部に立地している。北東が開析谷、北西が比高25mの段丘崖である。

館跡は東西約50m、南北約30mの方形の小さな館である。空堀が巡る単郭である。堀は台地側が一段低い畑地として利用されていることもあって、10mと幅広くなっている反面段丘崖では2～3mほどの段状を呈している。

郭内はほぼ平坦となっているが、段丘崖の縁辺部では堀跡この識別が困難である。全面松林となっており、木賊が繁茂している。

なお、北西約300mには長渡路館、南西約200mには長流部館が存在している。

古来、「エゾ館」と呼ばれており、古い要素を残していると考えられるが、発掘調査等は実施されておらず、詳細は不明である。

佐比内館（館市館）　安代町館市

米代川とその支流兄川との合流点に臨む小高い丘陵の突端上に築かれた館である。館の北側眼下、合流点の手前には、田山館市の集落が広がる。集落との比高は40m程である。館の北面は米代川に臨む急峻な崖、同様に西面は兄川に沿った険しい断崖である。東面は米代川に注ぐ深い沢によって切られている。また、南面は幅10～20mの2重の空堀で奥羽山脈へと続く山陵の斜面を切ってある。単郭の館で郭の広さは東西50m×南北70m程である。空堀の他には特に遺構は見当らない。現況は畑、山林である。

東は二戸へ、西は花輪へ通じる鹿角街道を間近ににらみ、さらには平館方面に抜ける兄川沿いの道を押える交通の要所、軍事拠点である。

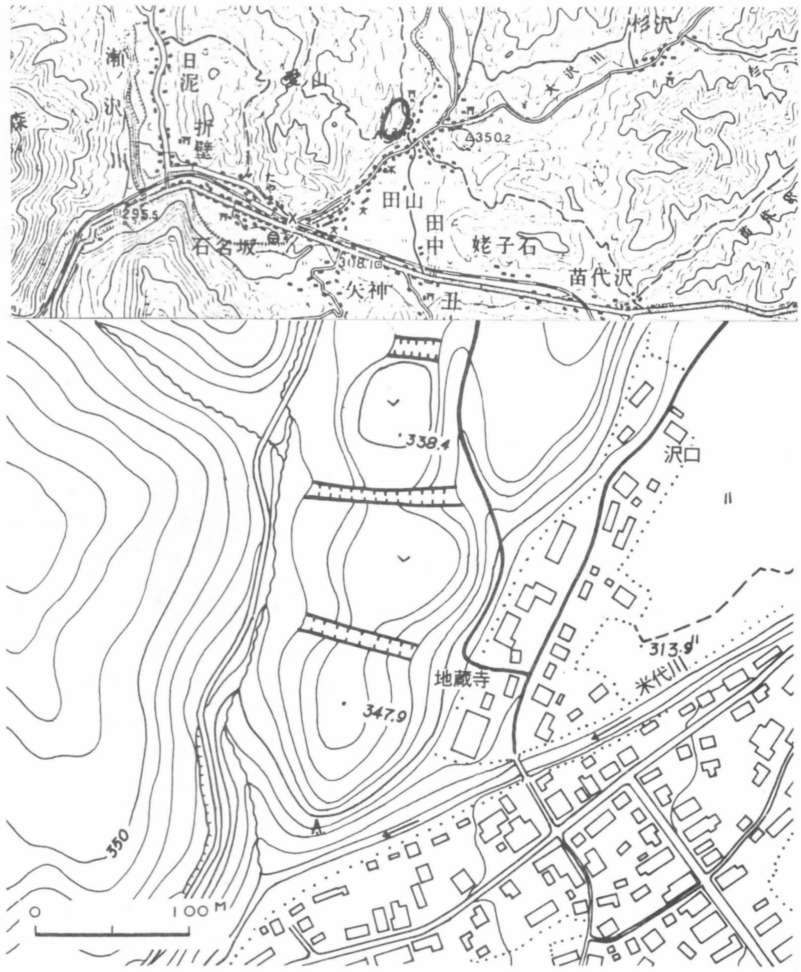
佐比内氏は成田氏の一族であり、「鹿角由来記等」には、館市は佐比内采女の領地とある。

田山館　安代町沢口

米代川の上流（根石川）右岸、田山の集落（田山本村）を北から見下ろす丘陵上にある。集落を乗せる沖積面からの比高は30～40mである。南北に細長い館で(南北300m×東西150m）南面は米代川に臨む険しい崖であり、西側は米代川に注ぐ深い沢によって切られている。３つの郭からなり、北側から順に上館(東西70m×南北110m)、中館(東西50m×南北60m)、下館（東西80m×南北80m）と呼ばれている。館の北面及び各郭の間は幅10m前後、深さ７～８mの空堀によって隅てられている。現況は殆どが畑で、一部山林となっている。下館の東側下は浄法寺福蔵寺の末寺、曹洞宗地蔵寺の境内である。

この地は二戸と鹿角の国境にあたり、交通の要所であったため、中世以前は重要な軍事上の拠点であった。

浄法寺氏系図によれば、浄法寺氏９代重久の３男、久光を田山におくり、田山藤十郎と称したという。



晴山館　九戸郡軽米町大字晴山字築ヶ沢

晴山地区は軽米町の北西方向に位置する。館は下晴山南東の平地に突き出た丘陵の３郭からなり、西側の郭は東西120m、南北100m、東側の一段低い郭は30×50m、更に北側は100×100mで郭の間と後方の丘陵との境に堀がめぐる。各郭には更に２段の平場があり、50×20mの範囲に西端の部分が１段高くなっている。城山と呼ばれる東端の郭は白山神社、城山稲荷神社の境内となり、南側の郭は開田のために削平されている。居住者は、戦国時代末期に九戸政実の有力な家臣として九戸城に篭城した晴山治部少輔の居館だと言われるが、詳細については明らかでない。主郭と考えられる西側の館から昭和51年に多量の蓄銭が出土している。晴山館周辺の谷すじには館が多く、北側の対岸に高館がある他、西方に新山館、北東方向に高家館、上尾田の館、ふん館などが分布している。その中でも晴山館は眺望が良く、晴山、高家の集落を一望できる位置にある。

高家館　九戸郡軽米町大字高家字釜ノ沢

瀬月内川流域の高家部落南側の丘陵地に位置している。東西80m、南北100mの単郭でその周囲に幅7～8m、深さ4～5mの堀が二重、あるいは三重に巡り区画している。平場の東端に幅5m、高さ2～3mの墨状の凸地がある以外、平場はほぼ平坦になっているが、北西端に腰郭状の平坦地が数段連続している。平地との比高は40m程あるが、県道から館に通ずる小道のある北側にも道を挟んで両側に長さ150m、幅30mの平坦面があり侍屋敷の跡と言われている。高家は二戸～軽米と三戸、八戸へ通ずる交通の要所にあり、南方2～3kmには晴山館がある。

築城時期、存続時期ともに明確でないが、戦国時代末期に九戸政実方として参戦した高家将監の居館だと言われている。高家氏の詳細も不明であるが、西方の水吉部落の県境近くに伝高家将監の基と言われる五輪塔がある。保存状態も良く遺構も比較的明瞭に残っている。

上館　九戸郡軽米町上館字下町

軽米の南東2kmの上館に位置する。上館は久慈街道と軽米から九戸へ通ずる道路沿いに発達した集落でその間を雪谷川が蛇行している。館はこの雪谷川の南岸の段丘面にあり、東西60m、南北120m、東西80m、南北30mの2郭からなり、前者の郭には、幅8～10m、深さ3～5mの大規模な堀がめぐるが、雪屋川に面した北側は急崖であり堀が途切れるし、後者の郭では堀跡は確認できない。平場はかって上館小学校の敷地であったし、現在でも農機具センターの建物があるため破壊されているが、堀跡は畑地、あるいは田圃となっており保存状態は良い。

館主、存続時期ともに定かでないが、戦国時代末期に九戸城に篭城した工藤右馬之助兼綱の居館だとも言われている。東方1kmには同じ戦国時代に活躍した車門小左衛門の居館である車門館がある。

くず館　九戸郡軽米町大字小軽米字釜谷平

軽米町の南東に位置する小軽米集落の西方丘陵上に位置する。雪谷川を隔てた東側1kmには小軽米城がある。自然の沢と雪谷川の間に突き出た丘陵の鞍部に堀を構築した単郭で、雪谷川に面した南側は比高20mの断崖、北側から西側に巡る堀は幅6～8m、深さ2～3mとなっている。平場は東西150m、南北120mの三角形を呈し、三角形の頂部の南北両側に腰郭状の小規模な平坦地があるが、この平坦地も堀跡の可能性が強い。平場は南側は一部雑木林となっている他は草地であり、保存状態の良好な館である。館からは小軽米の南側の沖積地を一望できる。

築城時期、存続時期等も不明であるが、小軽米に居住した小軽米氏一族の居城ではないかと言われている。対岸の標高220mの独立丘陵に月山神社がある。

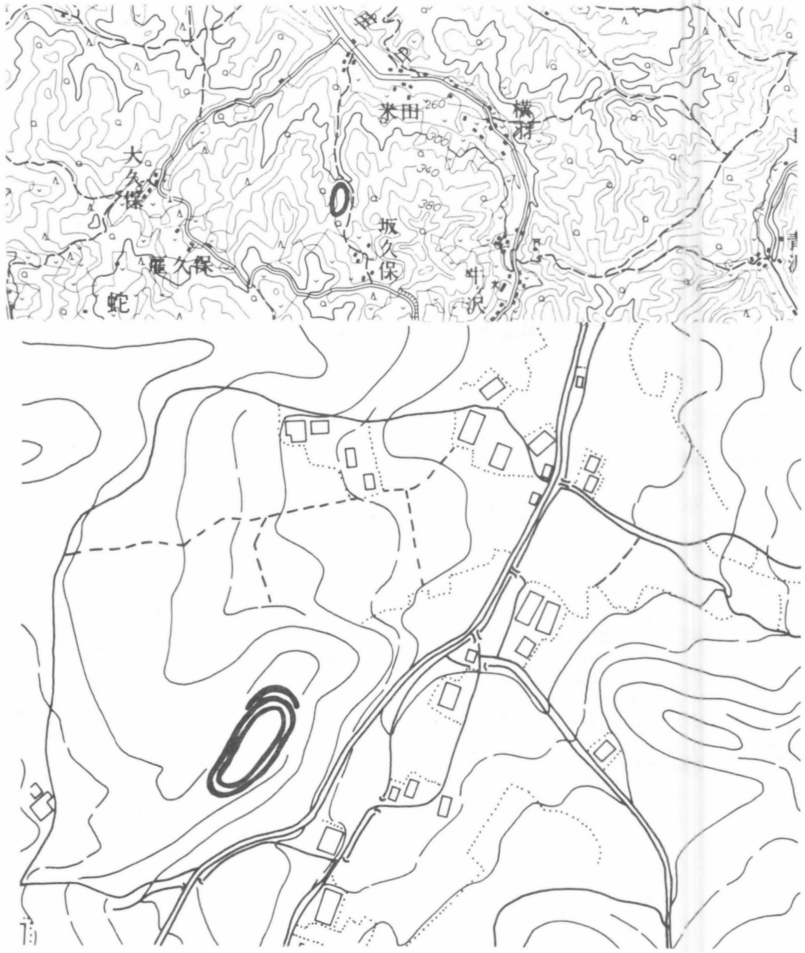
小軽米城　九戸郡軽米町小軽米字田屋

九戸街道に沿った小軽米集落の東側で雪谷川に突き出ている標高240mの断丘面に位置する。雪谷川沿いの沖積地との比高は20mで、川に面した館の西側は急崖となっているが後方の丘陵に連続する東側と南北に堀を構築した東西80m、南北160mの平山城である。平場は三段になり、東側の頂部は10×40mの平坦面となり八幡宮の小祠がある。堀は幅が6～7m、深さ4～5mで南北両側の中途で途切れている。

築城者、存続時期ともに不明であるが、戦国時代末期には南部一族の小軽米佐衛門佐が居住していたと言われ、九戸争乱時には野田氏、種市氏とともに信直方として参戦している。終結後諸城破却令に書き上げられており廃城となった。城からは小軽米の集落を一望できる他西方2kmに小軽米城と関係あると言われるくず館がある。

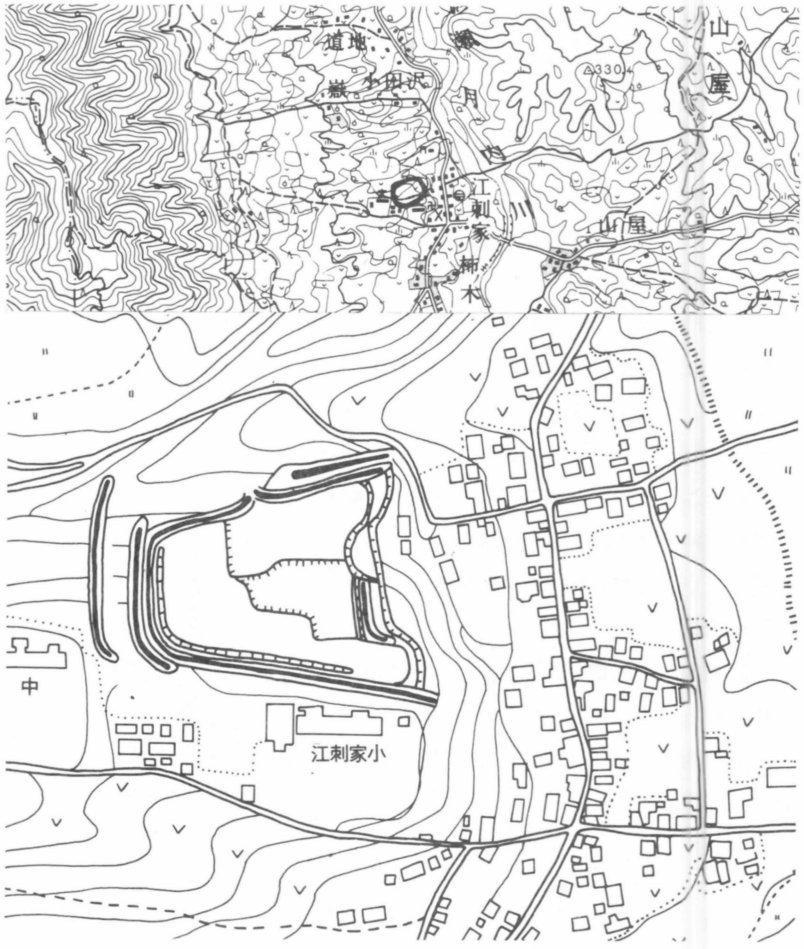
なら館　九戸郡軽米町大字小軽米字莇内

軽米町南東の山間地に位置している。周辺は米田川沿いに米田、横羽、牛ケ沢の集落が点在するが、その集落から２～３km離れた山地にあり、最も近い坂久保の集落からでも１km程離れている。館は標高300m、比高30m越える山地頂部にあり、単郭で小規模な平場を持つが、平場の中に径５～６mの竪穴状の凹地が４ケ所に残っている。平場下の斜面には南側に２条、北側に４条の堀跡がありところどころ途切れるがほぼ一巡している。全面雑木林となっており保存状態も良い。館主、時期ともに不明であるが沖積地、あるいは平野部から比較的遠く離れ、山地頂央、山麓に位置する館が軽米町では比較的調査されており、館、館森、蝦夷森、館ぐし、古館、古山と呼ばれている。以上の館は軽米町の城館の半数以上を占めている。竪穴の痕跡は、なら館南方の民田山の館森でも確認できる。



江刺家館　九戸郡九戸村大字江刺家字江刺家

九戸村の北部にあたる旧江刺家村の中心部江刺家に位置する。江刺家周辺では、集落の西側に段丘面が広く分布するが、その先端部に館を構築している。東西170m、南北80～120mの東西方向に長い郭で、南北の谷筋と西側に幅10m、深さ８～10mの規模の大きい堀があり、西側と北側では一部二重になっている。東側には腰郭状の平場が段状に続きそのまま10数mの段丘崖となるが、この小規模な平場にも堀が残り、しかも土塁を伴なっている。この土塁は南側で一部途切れるが、そのまま西側まで連続している。平場は三段になり、全体に西から東へ低くなるが、特に中央部分が両脇より更に一段低くなる。西側に約30m程隔てた丘陵地にも南北の堀があり区画されるが、現状では平場とした痕跡はない。北側中央では堀が途切れる箇所がある。あるいは虎口か。館主は室町時代は九戸信伸、戦国時代になり江刺家氏に交替したと言われる。



伊保内館　九戸郡九戸村大字伊保内字伊保内

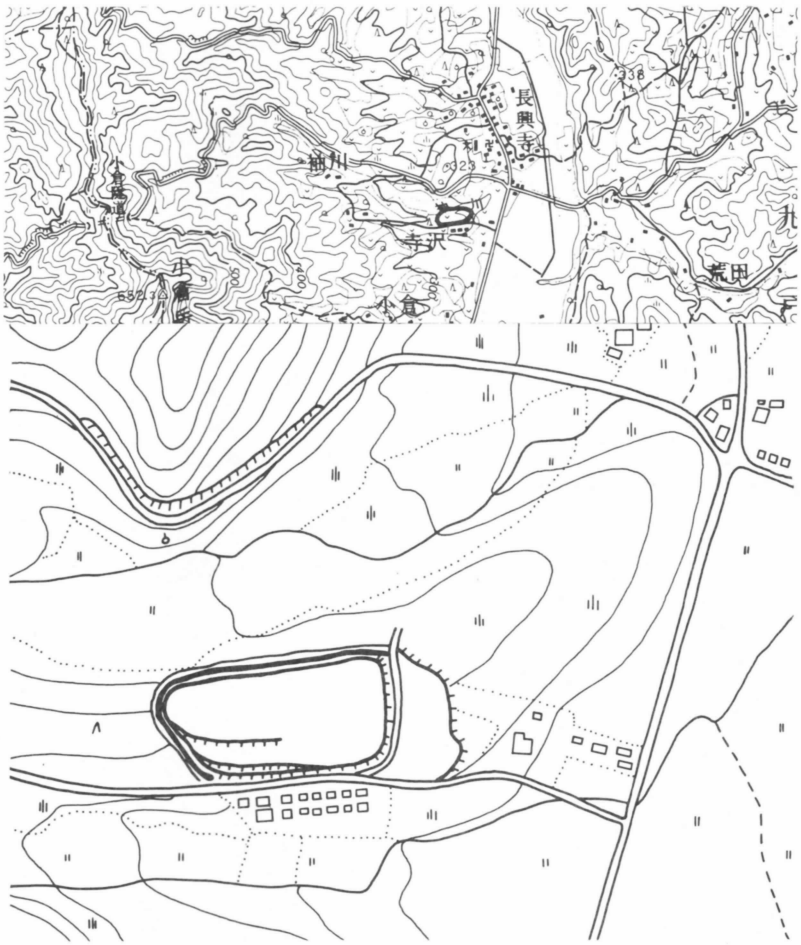
九戸村の中心部である伊保内の西側段丘面に位置し、館からは瀬月内に沿って発達した伊保内の市街地を一望できる。別名宮野城ともいい大館、小館の２館より構成されるというが、小館には伊保内幼児園があり、周囲を谷で囲まれているだけで現状では堀等の遺構は確認できない。遺構が明瞭に残るのは、大館の南側から西側にかけてで、幅10m、深さ３～５mの堀がめぐり、更に西側では幅３～４m、高さ１～２mの土塁を伴なっている。郭の規模は大きく、大館で南北130m、東西200m、小館で東西150m、南北で100m程であるが、小館の南側は緩斜面となっている。瀬月内川に面した東側の段丘崖にも小規模な平場が段状に残るが、この平場の一部に近世以降建てられた円満寺があり一部壊わされている。

築城者、沿革ともに不明であるが、伊保内美濃、あるいは周辺の大名館、熊野館とともに九戸南部一族の居館だと言われている。

大名館　九戸郡九戸村長興寺

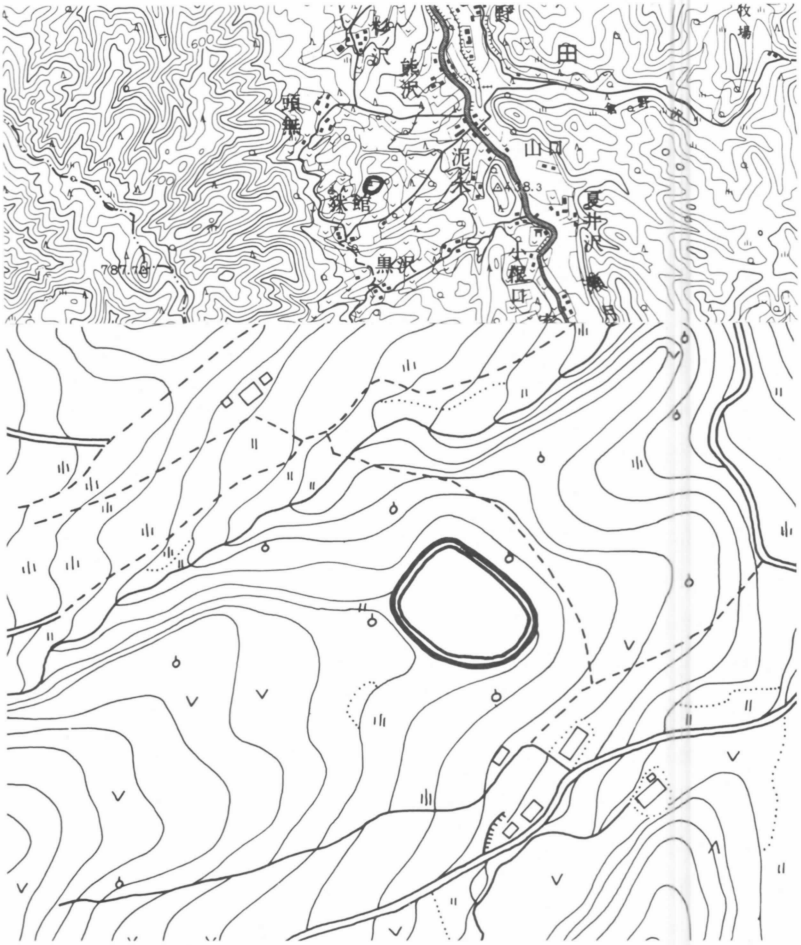
長興寺集落の南西１kmに位置する。国道340号線を西側に折れる直線的な九戸神社の参道北側に沿って平野部に突き出た標高300mの丘陵地が館である。郭は東西200m、南北70mの長方形を呈し、北側から西側にかけて幅７～８m、深さ３～５mの堀が残存する。南側の堀は、九戸神社の参道で途切れるが、そのまま一周していたのが道路により削られたものと思われる。平場は牧草地となり平坦面が続くが、郭の南側は緩やかな斜面で、東西に長い平場を設けており段状になっている。郭の東側は比高２～３mの崖となり、更に一段低い100×50mの南北に長い平坦面がある。この平坦面は外館と呼ばれ、かつてその北側に堀があったらしいが、あるいは腰郭的な平場であろうか。

居住者は、熊野館、伊保内館同様九戸南部氏の一族と言われ、九戸南部氏ゆかりの九戸神社が西側500mの近距離にある他、北側の寺林に同じ九戸南部氏の菩提寺であった長興寺がある。



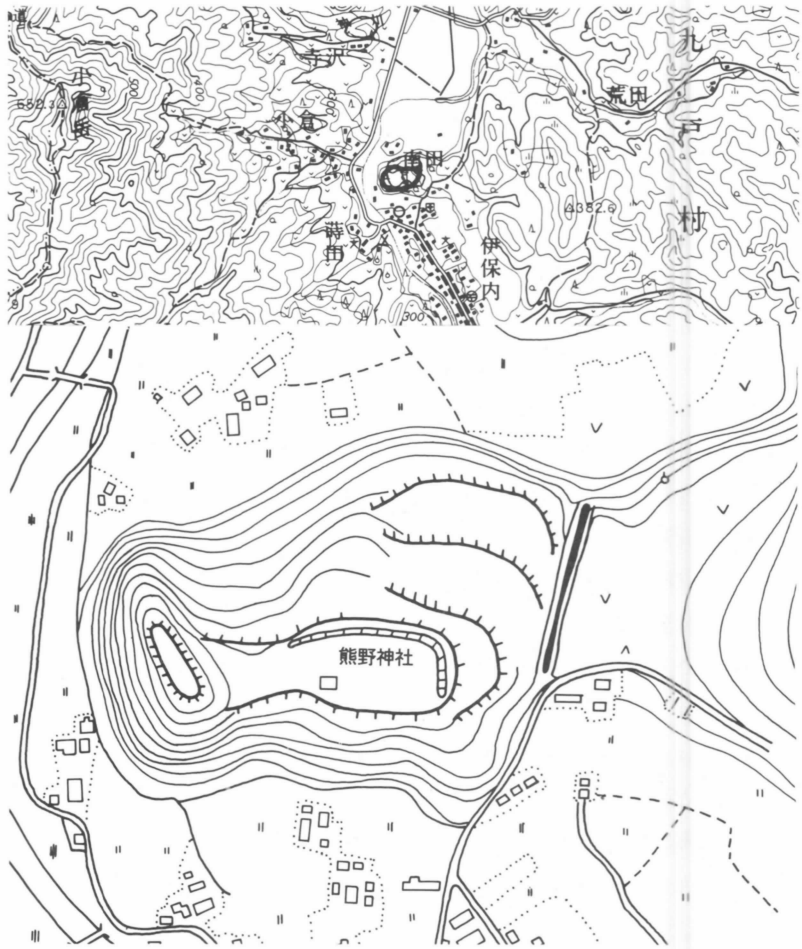
狄館　九戸郡九戸村大字戸田字狄館

九戸村の中心部伊保内から南へ10km離れた戸田地区の泥ノ木で、更に西方に1km入った狄館集落の手前に位置する。典型的な山城で、山地から突き出た標高400mの蝦夷森と呼ばれている山頂にあり北側の小谷も蝦夷森沢と呼ばれるが、この沢との比高30mの山地頂部に幅4～5mの堀をめぐらし構築している。堀は、後方の山地へ続く西側で、深さ1～2mの凹地として残るが、斜面上にある東側では埋まったのか平担になっている。平場は狭く、南北20m、東西15mの楕円形を呈し、その中に径5～6m、深さ20～30cmの竪穴の痕跡が数ヶ所にあり、更に西側の堀の外側に位置する馬背状の鞍部にまで分布している。周辺では、泥ノ木の集落と瀬月内川を隔てた対岸の山地頂上に高倉館があり同じく蝦夷館と呼ばれ、いずれも古代末期の館ではないかとも言われているが、居館者、時期等その内容は不明である。



熊野館　九戸郡九戸村伊保内

伊保内の市街地の北側で谷底平野に突き出た比高60m程の山地に立地する。瀬月内川の対岸には、北側に大名館、南側に伊保内館があり、それぞれ熊野館からほぼ1kmの近距離に位置している。山は、そのまま後方の山地へと連続しているが、幅が狭くなり、しかも比較的比高の低い鞍部に幅10m、深さ3～5mの堀を穿ち区画している。郭は全体で東西220m、南北100mを測るが、自然地形に沿うように平場は数段に分かれている。瀬月内川に面した西側先端部の平場が最も高く、頂央に小規模な平坦面がある他、回りの斜面にも幅1～2mの平坦面が段状に続いている。あるいは堀跡であろうか。各平場は、熊野神社のある中央が最も大きく東西150m、南北30mの東西に長く、東側から北側にかけて幅1m、高さ0.5mの土塁状の土手がめぐる。この中央の平場から北東方向には更に数段平場が続いている。沿革等詳細については不明であるが、大名館、伊保内館と同じく九戸南部一族の居館であったろうと言われている。



(十三) 岩手県全域概観

面積15,278㎢の岩手県域は、明治9年（1876）に成立した。それは旧盛岡藩と仙台藩のそれぞれ一部の合体によったものであった。ここに本県の歴史的特色が顕著にあらわれている。すなわち、本県は歴史の各時点において、異なる歴史的環境(社会的環境)・自然環境をもつ地域の複合体であることが多かったのである。それはたとえば、縄文時代における大木系土器と円筒系土器の、弥生時代における大泉系土器と二枚橋系土器のそれぞれ併存、古代における律令制社会と非律令制社会の併存等を経過して、既述の両藩の存在にいたる経過で示されよう。

これに加えて、各時代・各期の政治情勢（とりわけ外方勢力の侵入）も影響し、より複雑な様相を出現させたのである。このような背景が、本県の城館類のあり方に大きく影響しているのである。

確認された1,429ケ所の城館類は5種に大別できる。①平安時代初期の律令政府の城柵・官衙類（胆沢城・志波城・徳丹城。なお、県央から県南部に散見する「方八丁」なる地名は、郡衙や駅家等の地方官衙に関係する可能性が指摘されているが、胆沢城・志波城のほかは未確認である)。②古代末期の安部氏・平泉藤原氏等の在地豪族の居館類（金ケ崎町鳥海柵跡等。これらの擬定地は多いが、遺構類が確認されているのは少ない)。③中世から近世初期までの城館類。これらには本城と支城、居城と物見等の機能の別がある。司東調査員の指摘のとおり、これらは組み合わせとして理解すべきものである。④中世末から近世初期の環濠屋敷等の、いわゆる豪族屋敷類。③よりは小規模で構造も単純であるが、県南部を中心に明確に分布する。⑤山頂部に立地し、頂部の平坦部の囲りに堀や土塁をまわすもの。中には、竪穴住居様の凹みを複数伴うものもある。また、向かいあって存在する例も多い。居住者・築城者名に関する伝承をいっさいもたない。

大略以上のとおりである。これらを概観すると、いくつかの傾向性を指摘できる。まず、それぞれの立地の時代的特徴である（もちろん、立地は当該地方の自然地形に基本的には制約されるが、全県を見通した場合の傾向性ということである)。①はいうまでもなく低位段丘面上の平坦部に限定される。②も同様の面上だが、胆沢川等北上川に注ぐ支流の北岸に立地することが多い。③は地域によって変化に富むが、基本的には山城が優越する。胆沢・和賀地方の段丘崖に立地するものも、その比高差は大きく、実感は山城に近い。④は平坦部に立地する。その所領経営と密接にかかわった結果であろう。これら中世末までの地方豪族が近世の大肝煎等、地方支配の機関に登用されていく例も多い。⑤は時代その他の詳細は不明である。一部の試掘調査によると、既述の竪穴住居様の凹みから、古代末期（11世紀前後）の土器類が出土しており、少くともこれらの中に古代にまで遡るものが存在することは確実である。

次に構造面を見る。①は外郭と内郭の二重構造と、方形と左右対称の配置を原則とし、律令制下の官衙の性格を如実に示している。②は詳細不明であるが、空堀で区画された連郭式のものを含むことは確実である。鳥海柵においては、鍛冶工房と思われるものが集中的に存在した郭があり郭毎の機能分化が存在したことを窺わせる。③は単郭式・連郭式（複郭式、輪郭式等を含む）に二大別されるが、後者が多い。全体の縄張りの時代的特徴の把握など、今後の課題は多い。④は小規模であるが、周囲を堀で区画された方形基調の単郭式的なものが多い。⑤は山頂に立地した単郭式的なものが多い。頂部のやや下位に堀を数条まわすなど、特異な遺構配置を示すものが多い。

4ケ年にわたった調査によって、城館類の所在は一応確認された。今後若干の追補は予想されるが、その概要は把握されたといえ、よりいっそうの検討の深化がこれからの課題である。とりわけ、時代の特定には発掘調査が不可欠であり、それと結合させた検討が求められよう。

概述の⑤の性格は慎重に検討されなければならない。⑤は明らかに県北部に偏在し、しかも人名等の伝承は伴わないものの、エゾ館（蝦夷館、狄館、エン館、円館）等の呼称を伴うことが多い。エゾ館については、短絡的にチャシ等と同一視すべきではないとの本堂調査員の指摘があり従うべきであろう。エゾ館との呼称の上限の確認も必要である。江戸時代の文書には意外にその名は見えない。山頂に立地する小規模な施設は、通常の城館類に付属する物見的なものである可能性も大きいのである。

一方、既述のとおり、頂上の竪穴住居様のものから古代末期の土器類が出土し、これらが古代に属する可能性も強い。また、西根町や軽米町におけるが如くに、向かいあった山頂に立地する一対のものとして存在することも知られている。これらのことは通常の城館類には見られない特徴である。

11世紀代の本県は、前九・後三の両役の戦場であり、そのような政治情勢が上記のような施設を出現させている可能性もあろう。一種の「高地性集落」である。

いずれにせよ、その内容を確認したうえで性格規定を試みなければならないのはいうまでもない。

岩手県文化財調査報告書第82集

岩手県中世城館跡
分布調査報告書

印刷・発行　昭和61年3月

編集・発行　岩手県教育委員会
〒020 盛岡市内丸10番1号
Tel　0196—51—3111

印　　刷　山口北州印刷株式会社